瀧澤馬琴

溫澤馬學

停春樓著作

南總里見八犬傳第八輯巻之一

東都　曲亭主人編次

第七十四回

牛を牧く悍順給囮錢を辞ふ　杣を卸して磯に残雪を偸む

再説犬田小文吾悍順の那能程なる見牛の突兵衛なる勢に恐れ　當るべからざりしを些も
騒ぐ氣色なく閃りと反ると左右のよふ角を捷と捕駐う然ども性如怒牛の奮激
四蹄を壞ま踏入まぐる推倒さんと角へども小文吾も赤一身の力を極め拒あ之一歩だも退
るとも千曳の石の地中より見れ出て立る如くに烏獲が奔牛の尾を援留めも徒やと覺
えく和漢に儀家まで為稀有の壯觀であれが初は酷く薫蕾れく群易たる牛も土
仍ハ赤這舞の為体を看て再眼を淡くく彼とくとぞうるを抗足を空ん衆皆
四下に聚まるく怕れて近くに拱を沼を果しく齊一目成てくう然程に小文吾八

鎮元子
與世同君
仙童子明月
清風

民友社發行著者の著作

柿本人麿及其時代
濟民論
新國民の資格
成功論
時務的教育
讀史餘錄
風土と人情
地理と人事
國民と時勢

完
完
完
完
完
完
完
完
完

齊家小訓
家庭夜話
旅行日記
野中兼山
熊澤蕃山
巢林子戲曲
近松著作一班
臺灣
近松門左衛門

完
完
完
完
完
上下
上
完
完

『瀧澤馬琴』の著作に就て

明治三十五年十二月十七日の夜漸く「瀧瀧馬琴」を稿了するに至つた。思へば〳〵我ながらあきれるまでに難產の著作であつた。首を回せば、忽として最早十年の昔である。忘れもせぬ明治廿六年の初夏であつたが、吾輩は父の病を故山へ省して、暫く東京に居なかつた。其れから若干日を過ぎて、歸つて民友社の樓上へ往くと、歸省中に「十二文豪」著作の企があつて、已に夫々役割も定まり、唯近松巢林子と瀧澤馬琴とが、吾輩の受持として未だきめられずにあつた。底て誰ても宜しい、遣りませうと言ふて、之を引受け、俄に馬琴の履歷を調べたり、其著作を讀だり、饗庭篁村先生を數寄屋河岸へ訪ふたりして、十五日か二十日に之を書き上げ樣と致した。

所が、彼が著作の四百部二千卷をまるで讀まずに書く譯にも行かず、去ればとて其重要なものを讀むだけでも十五日や二十日ではとても出來ない。其れも非常に面白ければ、知らず識らずに讀むが、中には隨分面白くないのがある。就いては巢林子の方を先へ書き上げて、ゆる〳〵馬琴を書く事に致さうと、先づ巢林子を書いた。是が抑難產の初めであつた。

其内明治廿七八年の役は始まる、新聞の外に「國民の民」へも何か書く、曰く何、曰く何と云ふ樣な工合で、其儘に成つて居た。其間故谷口林太郎君から幾度となく促かされ、又赤坂靈南坂上へ僑居して居た頃からは、草野門平君の御勸を受けて、是非書かうとは思つたが、何分にも非常に忙しいのと、例の四百部二千卷でだん〳〵延期し、何時しか十年を夢の如くに過ぎて、漸つとの事で今夜書き上げることに成つたのである。

書き上げると同時に、深く感謝の意を致さなければならないのは、草野君と谷口君とである。非常な難產ながらも、兎に角之を書き了るに至つたのは、實に二君の賜であるからである。唯憾むらくは、谷口君が已に斯世には居られずして、君の墓木は今や已に拱すべきものと成つた。此の書の稿了と共に、幾多の感慨と連想とは、どうも湧出する事を禁じ得ない。

其れから此の書を稿するに就ては、篁村曙庭先生に頗る負ふ所が多い。是は特に感謝の意を致さなければ成らない。又卷首に掲げた馬琴自筆の「八犬傳」草稿と、馬琴自畫の「金毘羅船利生纜」第六編一の卷の口繪下書きとは、何れも、篁村先生の珍藏する所のものである。外に先生の珍藏で、陸某の手になつた漢字歐文兩樣に「著作堂」

と認めてある馬琴が書齋の額も、同く卷首に掲ける筈で撮影をさせたが、何分にも額が黑く成つて居て、字體が分らないので、已むを得ず掲出を見合せた。

馬琴の傳記は、之を精しく書かうと思へば、殆ど其毎日の事でも分る。然し是は自ら其人があちらと思ふから、吾輩は左迄精しくは書かなむだ。現に幾年前であつたか「早稻田文學」へ、曉霞處士と云ふ人が馬琴傳を書いたが、相應に詳しく出來て居たと思ふ。此の書も處士に若干の負ふ所がある。是亦深く感謝しなければ成らない。

また此の書へ江戸の小說史を一章を挿むで、小說史中の馬琴の位置を明さうと思つたが、是は餘り長くなるので見合せた。のみならず馬琴を色々な人と比較をして論することなども、同樣の理由で同く拔きに致した。

序てあるから、馬琴流に本書以外の正誤をするが、其れは我輩が嚮に書いた「熊澤蕃山」の中に俳句か一首入れてあるが、あれである。あれは人から聞いた儘別に調べずに入れた所が、間違つて居た。あれは蕃山の句ではない。又「近松門左衛門」の百五頁に『今此新地に戀衣紀の國屋小春が、風呂より出たる浴衣姿にて』とあるのは、『南の風呂の浴衣より、今此新地に戀衣、紀の國屋小春』の誤てあつた。此は嘗て態々葉書て注意をしてくれた讀者があるので、特に之を正誤して置くのである。

明治三十五年十二月十七日夜、城北栴檀山の幽棲に於て

塚越停春

瀧澤馬琴

目錄

少　序……一
發端、彼は如何なる時代に出でし乎（寛政の日本）……三
第一章、彼は如何なる人なりし乎（馬琴の生涯）……三五
（一）瀧澤家……三五
（二）驕悍兒……四三
（三）無賴の年少……四八
（四）著作者としての前期……六一

(五) 著作者としての中期……七九
(六) 著作者としての晩期……一一五
(七) 馬琴の家庭及交友……一五五
(八) 馬琴の人物……一六六
第二章、彼は何を知りし乎(馬琴の理想)……一八三
(一) 馬琴の學問及理想……一八三
(二) 馬琴の眼に映じたる人……一九五
(三) 馬琴の眼に映じたる社會……二二一
(四) 馬琴の眼に映じたる靈力……二四二
第三章、彼は何を爲せし乎(馬琴の事業)……二五七
(一) 馬琴の主張……二五七

(二) 馬琴の著作的生涯……二六四
(三) 馬琴の文章……二八六
(四) 馬琴の代表的著作……三一七
(五) 馬琴の諧謔的戲曲……三四〇
(六) 馬琴の抒情詩……三四九
(七) 馬琴の考證的著作……三七五
(八) 馬琴と時の小說家……三八六
結論、彼は何を遺せし乎(馬琴の本領)……三九九

目錄了

瀧澤馬琴

小序

瀧澤馬琴！彼は如何なる時代に出てし乎。彼は如何なる人ありし乎。彼は何を知りし乎。彼は何をなせし乎。彼は何を遺せし乎。

吾人は之に答ふるか爲、多くの語るべきものを有す。

人生宇宙間。志願當如何。

不行萬里路。即讀萬卷書。

（馬琴）

發端、彼は如何なる時代に出でし乎

（寛政の日本）

近世三百年をうねり下れる時運の流が、一大展開をなして、沙鷗輕舟氣象萬千の文化的湖水を開きたりしその前後兩回。前なるを元祿時代とし、後なるを寛政時代とす。

元祿時代は、應仁以降百三十年の戰亂漸く收まり、內治を修飾することと茲に七十年にして、始めて開きたるの時代にして、一方には戰

國の氣習未だ全く脱せざると共に、一方には朝野共に長休憩より起ちて一齊に活動を思ひ、遂に東照公(家康)以來の富を散じて、驕奢の波を揚げ、豪華の潮を湧じたる時なりき。是を以て慶長元和以來の經營は悉く發して文化の花となれり。江戸將軍は方に尊嚴の中心に立ち、千代田城雲深ふして天下の萬衆公方の貴きを仰がずといふなく、都會の繁昌は日一日より大に、碧甍粼々、樓臺參差として、祥烟は起り、絃歌は湧けり。婦人の帶は全絹を用ゆる迄に廣くなれり。黄金作りの太刀は伊達に差さるゝに至れり。金鞍白馬にして章臺の柳を折る執金吾あり。粉黛宮樣にして觀劇の場に入る奥女中あり。長安の大道に六方を踏み去る町奴あり。道に喝して天に朝する相將あり。湯島の大成殿は新に建てられたり。將軍の祈願所たる護國寺護法寺大護寺靈雲寺は新に造られたり。大日本史の編輯局は開かれ

たり。經世家として、學者として、熊澤蕃山、山鹿素行、伊藤仁齋木下順菴、萩生徂徠、山崎闇齋、新井白石、太宰春臺、室鳩巣、貝原益軒、書木敦書、劇詩家として近松巣林子、小説家として井原西鶴、書家として尾形光琳、英一蝶、菱川師宣、演劇家として第一世市川團十郎、俳家として松尾芭蕉、榎本其角、醫家として後藤艮山事業家として河村瑞軒、數學者として保井算哲、國學者として僧契沖、荷田春滿、賀茂眞淵、湖月抄の作者として北村季吟等の人豪は輩出せり。武力に對して富力は起れり。貴族的勢力に抗して平民的勢力は頭を擡げり。京都的文明と江戸的文明とは交錯せり。地方的武健と都會的華奢とは相搏てり。百工技藝は並起れり。あらゆる文物は勃生せり。恰も陽春一たび和して梅櫻桃李競ふて發き、山澤陂池到る處、處として春草の茂き者あるが如き觀ありき。豪縱は其特色也。放

逸奢泰は其特色也。疎枝大葉は其特色也。雄華は其特色也。進むを知て退くを知らざるは其特色也。正邪を標準とせずしてゐらざるとゐらざるとを標準としたるは其特色也。群雄並起て統一する所なきは其特色也。現世を愛好して後圖心貯蓄心に富まざるは其特色也爭て一流一派の旗幟を飄して、一藝一能の唱首となり、發起者となり、開拓者となるを勉めたるは其特色也。若々しきは其特色也。無邪氣なるは其特色也。無分別なるは其特色也。放膽的なるは其特色也。雄大なるは其特色也。約言すれば、元祿時代は春の時代にして晉に百花の亂發したるのみならず、宮に千草の雜生したるのみならず、風吹あり、雨打あり、啼鳥あり、落花ありて、喜悲縱橫、歡愁淋漓たるの光景を現し、竟に肅殺收束の氣象はなかりき。

寬政時代は之に同じからず。元和偃武より百七十年、享保將軍の中興より七十年にして、安永天明の大墮落時代を經、之か文化は已に頗る成熟の態なきこと能はざりし也。

是より先元祿に於ける豪奢縱佚の風滔々として止まらず、累世の富は殆ど散し盡され、次くに萩原重秀の貨幣改鑄を以てして足らず、東照公大猷公(家光)の覇業は遂に漸く頽廢に歸せむと欲するに當り、有德將軍吉宗英邁の姿を以て入て幕府の主人となり、弊政を革め、浮華を退け、紀綱を張り、文敎を勵まし、殊に力を民力の休養、富源の開拓に致したりき。是所謂享保の中興にして、江戸の覇業は再び其威力を恢復することを得たりし也。然るに其後三十年にして柔儒なる惇信公家重の代となり、更に二十年にして凡庸なる俊明公家治の世となり、紀綱は再び弛ひて安永天明の田沼時代となれり。地方は今未だ享保の遺風を存し、紀伊に德川治貞あり、肥後に細川重賢

あり、出羽に上杉治憲ありて邊民其惠に賴りたれども、中央は早く已に清健質直の風を失ひ、剛直を以て世の容るゝ所とならざりし老中秋元涼朝は、俊明將軍の明和四年を以て病免し、側衆田沼意次は側用人となり、五千石を加賜せられ(合計二萬石)、遠州相良に築城主の列に入り、同六年に老中格となりて、更に五千石を加賜せられたり。一方に忠恪謹直を以て知られたる老中松平武元の如き、精勤三十年にして僅に七千石を加賜せられたるのみなりしに、彼は更に安永六年七千石を加賜せられ、彼を相善き水野忠友の如きは彼の後を繼で側用人となり、亦七千石を加賜せられ、其黨米倉昌晴は若年寄となり、側衆稻葉正明は二千石を加賜せられたり。而して安永八年享保の遺老たる老中松平武元が歿するに及び、天下の政柄は全く田沼黨に歸し、天明二年側用人忠友は老中並となり、奥勤元の如く、

勝手方を命ぜられ、國用に關する事とは悉く忠友一人に申出さしめ諸證文亦忠友の一判たるべしと令せられ、幕府の財政は一に其掌中に落ちたり。蓋し忠友は意次が子忠德を子養し、以て深く互に相結托しつゝありたるもの也。此くの如くにして彼等は、大に積極の政策を取り、一方に山野水澤の利源を開くと共に、一方には歲入の增加を圖り、以て膨脹し來る幕府の經濟を辨せむと欲し、或は新田の開墾をなし、或は印幡沼の開鑿を經營し、或は大坂の富商に令して貯金を出さしめ、官之を諸侯に貸して得る所の息七分の一を官に納れしめ、或は令して諸國の寺社山伏より金十五兩以下を等差に應して出さしめ、幕領と諸侯領とを問はず諸國の百姓より五箇年を期し持高百石に付銀廿五匁づゝを出さしめ、諸國の町人よりは間口一間に付銀三匁を出さしめ、而して之に官金を加へ、以て之を諸侯に貸

付くるに至りき。

大政の方針此くの如し、上下焉ぞ靡然として利殖に趨らざるを得むや。廉耻の士風は自ら衰へざる能はざりし也。明和三年には小普請組外村大吉なるもの斬に處せられ、連坐五人は遠流せられたり。四年には勤仕を怠り縱恣なる輩の沙汰せらるゝ者數十人ありたり。小普請遠藤甚四郎は遠流せられたり。博奕、三笠附、取退無盡、富突等に關する禁令は申明せられたり。强訴、徒黨、逃散に關する禁令も申明せられたり。辻番所にして夜中戸を閉ち受持區の見廻をなさず、又怪しき者の通行すを見遁すか爲、之を戒飾するの令は出てたり。高札を日本橋に建てゝ、放火者を捕來り、若くは之を官に告くるものは、銀三十枚を賞すべしと稱せり。五年に小普請内藤四郎兵衛か途上に行倒れて死したるを隱くし、急養子をなさむとして事

露はれ、其母及び親族は罪せられたり。大番下枝重遠は甚しき失行をなして遠流せられ、多くの連坐者を出したり。本年に浪人と稱して民家に入り、脅喝取財をなすものあるを禁ずるの令は出でたり。阿波守松平重喜は政治不行届の故を以て隱居慎を命せられたり。七年に各村落に高札を建添へて、徒黨、强訴、逃散の密告者に銀百枚を賞するの令を布けり。故代官淺井作左衛門は引負あるか爲に收祿せられたり。代官池田喜八郎は負債多く引負重なりしを以て職を奪はれ、祿百俵を容れて年々之を償へり。安永元年に上野凌雲院大僧正義順は威福を恣にし、私利を謀りて追放せられたり。三年に虛無僧修行者の民家にねだり脅迫をなすを禁せり。小普請大岡助左衛門は斬罪に處せられ、連坐數人を出せり。禁裡御賄頭田村肥後、御勘使津田能登、服部左門、御買物役西池主鈴は斬罪に處せられ、院御執

次高屋近江、禁裡御勘使藤井修理、女院御取次元勘使關月縫殿は遠島に流され、御賄頭飯室左衛門は追放せられ、其他重立ちたる御所方役人四十人は追放、小役人百八十七人は洛中洛外並に江戸構、又は叱、藤井伊豫守、河井和泉守は幽閉、御用達町人四人は所拂、百三十七人は過料に處せられたり。浪人修驗者の令は申明せられたり。四年に目付建部六右衛門は職を奪はれたり。大番鄉渡高陣は斬に處せられたり。五年に醫師細川宗仙、神谷某は博奕をなして遠流せられたり。六年に信州高井水内二郡の民は、代官役所に押寄せて强訴をなしたり。强訴、徒黨、逃散の禁令は申明せられたり。博奕殺傷の故を以て大番飯室昌貞は遠流せられ、子八郎左衛門は死罪に處せられ、松田直勝及び其子伴五郎は追放せられたり。七年に穢多非人等の民を苦むるを取締らしめたり。小普請齋藤八十郎が父傳八郎の妾清信院尼は、もと夫あるものなるに傳八郎と姦して之が妻となり、傳八郎死後町人宗七と姦して八十郎を縊殺したるを以て其屍を磔せられ、宗七は梟首に處せられ、同謀者は遠流せられたり。天明元年に小普請本庄巳之助は博奕又は不良の行あるを以て遠流せられたり。中川久貞か子久德は放蕩を以て蟄居を命ぜられ、久貞は逼塞、家人は斬罪又遠流に處せられたり。六年に寄合藤枝敎行は遊女と情死して祿四千石を收められたり。奥醫師松本善甫は市人と爭鬪して改易せられたり。遂に俚謠子をして或は謠ふて、『世に逢ふは、導樂者に驕り者、轉び藝者に、山師運上。』と曰ひ、或は謠ふて『世に逢はぬ、武藝、學問、御番衆の只奉公に、律義なる人。』と曰ひ、或は謠ふて『世の中は、諸事御尤、有り難い、御前御機嫌、扨恐れ入る。』と曰はしむるに至りき。

是れ實に當年に於ける社會墮落の一返照に過ぎざりしのみ。其如何に驕奢の風盛なりし乎は、田沼意次の妾某の假親たる侍醫千賀道有が十八箇所の町屋敷を所有し、二千坪の邸宅に住し、家屋庭園の善美を窮め、夏日納涼の座敷の如き、硝子張の天井に水を盛りて金魚を放置したりしと云ふを見ても、其一斑を察し得べきに非ずや。其如何に賄賂の公行したる乎は、長崎奉行二千兩御目附千兩と稱する如き賄賂の相場立ちたりしと云ふを見ても、其一斑を察し得べきに非ずや。又其如何に肉慾的天國なりし乎は、花の大江戸を擧げて一大賣色區となさむと欲し、傾城、かげま、比久尼、けころ、藝者、夜鷹、船饅頭等の吉原に、根津に、谷中いろは茶屋に、音羽に、赤坂に、氷川に、麹町天神に、大久保七〻谷に、下谷柳の稻荷に、三島門前に、淺草朝鮮長家に、同く大根畑に、同く堂前に、赤羽根に、芝神明社内に、高輪に、中町に、花房町に、三田三角に、淺草馬道に、蒟蒻島に、八町堀代地に、上野下佛棚に、同く三枚橋東側に、藪下に、麻布市兵衛町に、鮫が橋に、兩國回向院前に、銀猫に同く辨天金猫に、同くおたびに、同く松井町に、入江町に、深川仲町に、大橋に、櫓下に、裏やくらに、すそつきに、三十三間堂に、直助長家に、入船町に、網打場に、古石場に、新石場に、新地に、大橋に、又深川吉永町に在りたりと云ふを見ても、其一斑を察し得べきに非ずや。將た其風尚の如何に墮落的風尚なりし乎は、遊蕩者の魁たる十八大通が天下喝采の中心たりしを見ても、女相撲の一大流行をなしたりしを見ても、之が一斑を察し得べきに非ずや。赤本洒落本の重なる作者中明誠堂喜三二は佐竹侯の留守居平澤平角、戀川春町は松平丹後守の留守居倉橋壽平、芝全交は大藏流の狂言師山本

藤十郎、唐來三和はゞと武士、田螺金魚は町醫の子、森羅萬象は法眼桂川甫周の弟森島中良なりしと云ふを見ても、其一斑を察し得べきに非ずや。

天國の反面には地獄あり。一方に驕奢淫佚に惟日も足らざるものあるの傍、一方には民に菜色あり、途に餓莩あり、天災地妖は續出したりき。安永元年二月には江戸の大火ありて其大半を燒拂ひ、明暦以來の大火と稱せられたり。八月には暴風雨あり。三年六月には大風あり。九年六月には霖雨あり。天明三年七月には有名なる淺間山の大噴火あり。四葉には天下大に飢え、奥羽殊に甚しく、加ふるに疫癘大に行はれて、死者數十萬と稱せられたり。六年春には江戸市中火災夜を連ねて人心恟々たるに加へ、六月には大雨大水開府以來曾て有らざるの大水害を出せり。是に於て誹謗は百出せり。窮民は蜂起せり。志士は憤慨せり。勤王家は崛起せり。山縣大貳藤井右門は明和四年を以て斬られ、竹内式部は逐はれたり。安永天明に至て、蒲生君平は出でたり。高山彦九郎も出でたり。安永二年に飛彈の代官大原彦四郎支配所の民は蜂起して高山の陣屋に强訴せり。天明二年に上州武州五十三村の民三千人は、群起して富商豪戸を襲ひ、松平輝高が高崎城に押寄せたり。翌三年には上州信州の飢民等黨を結ひて横行せり。高山彦九郎の如きは憤激の餘り、『紙旗を東照廟門に飄す乎、千人立ろに聚むべし、壓子(田沼)を梟するに於て何か有らむ』と叫ぶに至りき。遂に天明七年に及び、所謂打壞しなるもの大坂に始まりて近國に及び、果ては江戸にさへ起りて米商豪家を破壞せり、さしもに豪華繁昌を極めたりし大江戸の夢も爲に一旦驚破せられざるを得ざりしも。

去れば之が思想界も自ら世と伴はざるを得ず。元祿の昔朱學、南學（一派の朱學）、江西學（陽明學）、堀川學（復古學）、護園學（古文辭學）等並び榮え、享保以來一旦護園派の風靡する所となりたりしもの茲に五十年にして、反動的氣運は動けり。朱學と古學との調和を試みたる井上金峨、片山兼山、細井平洲等の折衷學は出てたり。支那詩調を俳諧に加味せむと欲したる與謝蕪村の十七字詩は起りたり。江戸趣味と大坂趣味とを混じたる江戸淨瑠璃は作られたり。關東關西の中間趣味を代表すべき横井也有の名古屋文學は開かれたり。功利主義に基ける平賀源内の物産學は唱へられたり。小澤芦菴の和歌は出てたり。「金々先生榮花の夢」の如き、「高慢齋行脚日記」の如き、「游子放言」の如き、「文武二道萬石篩」、「天下一面鏡の梅鉢」の如き、「傾城買虎之卷」、「通言總籬」の如き青本洒落本は愛讀せられたり。狂歌狂詩は起りたり。深井志道軒は金龍山畔に一世を罵倒したり。風來山人は「放屁論」を著して天下を嘲笑したり。

看來れは、其如何に折衷時代なりし乎、如何に無主張時代なりし乎、如何に無中心時代なりし乎、又如何に無英雄時代なりし乎を知るべき也。如何に頽弛時代なりし乎、如何に腐敗時代なりし乎を知るべき也。將た其如何に墮落時代なりし乎、如何に希望に乏しき時代なりし乎、如何に嘲笑冷罵の時代なりし乎を知るべき也。而して寛政時代は實に此くの如きの時代を經來りたる時代なりき。此くの如きの時代を承けて之を一振したる時代なりき。

天明六年九月將軍俊明公家治は薨じて、第十一世文恭將軍家齊は新に立てり。白川の樂翁侯越中守松平定信は天明七年を以て首席老中即ち事實上の內閣首相となり、忠厚樸茂なる彈正少弼本多忠籌を若

年寄とし、有爲なる遠江守加納久周を側衆取次とし、同八年方正剛直なる伊豆守松平信明を側用人とし、尋て老中に任じ、本多忠籌を側用人とし後老中に進め、采女正戸田氏敬を側用人となし、田沼意次水野忠友を罷めり。天明の政治は全く更革せられ、政事一に有德公享保の政に復すべしとの命令は出てたり。三箇年を期したる嚴重なる節儉令は發せられたり。總ての政治は振肅せられたり。文武の敎育は奬勵せられたり。大小各藩は爭て藩學を起せり、柴野彦助栗山、岡田清助寒泉、尾藤良助二洲等は、擢てられて儒官となれり。大奥の經費は節減せられたり。萬石以下圍米の制は立てられたり。幾多の產業は各地方に起されたり。旗本諸士古借金濟方並に棄捐の事は定められたり。寛政二年に異學の禁令は布かれたり。一種の出版令たる書物草紙に關する取締は定められたり。追鳥狩、遠乘、流鏑馬、

小金原鹿狩等は爲されたり。外國船取計方は令せられたり。町法は改正せられたり。房總豆相五國は松平定信自身に由りて巡視せられたり。加ふるに京師には近世の明主光格帝位に在りて、西に明天子あり、東に賢宰相ありと稱せられ、相應して百廢共に興れり。遂に着々として擧げられたる寛政の新政は、驕怠佚肆なる明和天明人の膽を驚破し、或は歌ふて『世の中にかほどうるさきものはなし、ぶんぶといひて夜も寢られず。』と曰はしむるに至りき。

此くの如くにして寛政の改革は緒に就き、紀綱は再ひ振ひ、奢侈の俗は漸く改まり、國民の元氣は稍昂らむと欲するに當り、新政の張本者たる松平定信は大奥の反對に逢ふて(或は云ふ、彼が職を罷むるの前日大封の書京都所司代より至ると)、在職七十四箇月を以て寛政五年に其任を去れり。享保の改革は將軍自ら改革の張本たるより其

事成り、其政擧りたりしも、寛政の改革は輔佐者之か張本たりしを以て、遂に其功を全ふするに至る能はざりき。而も彼れ定信か擧用したる松平信明、戸田氏教、本多忠籌、加納久周等は依然として位に在り。是を以て寛政の新政は猶暫く守て之を墮さゞることを得たりし也。

降て享和より文化文政に至る間は、恰も是れ寛政の新政か始めて其實を生じ其菓を結ひたるの時にして、時に北邊の警なきに非ざりしも久しからずして事定き、上下熙々として昇平を樂み、あらゆる文物は相爭ふて勃興したりき。當年の賢諸侯には鷹山侯上杉治憲の外に、薩摩の榮翁島津重豪の如きもあり。儒家には柴野栗山あり。林述齋あり。尾藤二洲あり。古賀精里あり。山本北山あり。龜田鵬齋あり。藤田幽谷あり。皆川淇園あり。中井竹山兄弟あり。龜井道載あり。賴春水あり。太田錦城あり。折衷時代は一轉して學風統一の時代となり、程朱派の全盛となりき。詩人には市河寛齋あり。其徒菊池五山、大窪詩佛、柏木如亭以下あり。菅茶山あり。而して清新の詩風を以て一代を風靡せり。國學者には塙保己一あり。本居宣長あり。伴蒿蹊あり。歌人には村田春海あり。加藤千蔭あり。香川景樹あり。景樹に至りて大に清新の歌風を煽けり。繪畫は圓山應擧出て、大に温麗なる京都的畫風を颺げ、江戸に在りては酒井抱一ありて再び光琳風の繪畫を興せり。我か洋畫家の祖先たる司馬江漢も出てたり。高名なる谷文晁も出てたり。呉月溪も出てたり。浮世繪の葛飾北齋も出てたり。南畫の田能村竹田も出でたり。畫猿の妙手森狙仙も出てたり。經世家林子平も出てたり。本草家小野蘭山も出でたり。測量家伊能忠敬も出てたり。天文方高橋作左衛門も出てたり。探驗家近藤重藏

も出てたり。蘭學者杉田元白、大槻玄澤も出てたり。俳諧には加藤曉臺、大島蓼太以下も出てたり。狂歌狂詩には太田蜀山人も出てたり。石川雅望六樹園(即ち五老、宿屋飯盛)も出てたり。劇詩家には並木五瓶、鶴屋南北も出てたり。小說家には山東京傳も出てたり。上田秋成も出でたり。山東京山も出てたり。島田一九も出てたり。菊池三馬も出でたり。高屋種彦も出てたり。爲永春永も出てたり。力士谷風梶之助も出てたり。雷電爲右衛門も出てたり。俳優五世團十郎市川白猿、三世菊之丞瀨川仙女、四世宗十郎澤村訥子、二世吉三郎嵐璃寛等も出てたり。而して各其能くする所を醵して、以て相共に前後半百年間の昇平を文飾せり。是に於て乎、我が近世期の文化は殆ど其絶頂に達したりき。江戸の繁昌は殆ど未曾て見ざりし盛況を顯はしたりき。從て之が中心たる

大將軍家は方に尊貴と榮耀と最高峯上に立てり。文政十年に將軍家齊は太政大臣となり、世子家慶は從一位に叙し、父子一時に尊榮を窮むると千古になき所なりと稱せられたり。既にして出羽守水野忠友か再び出て、西の丸老中となるに及び、豐侈の漸稍崩したるに加へ、本多忠籌加納久周等の相踵て去るあり、松平信明の文化十四年に歿するありて、其翌文政元年忠友の養子水野出羽守忠成か勝手掛となるに及び、華奢の俗は大に興り、將軍家の宮中は首として花の如くに裝はれたり。家齊は職に在ること五十餘年にして、五十餘子を擧げ、多くは出て、大小の侯伯家を繼げり。大將軍家の此の如きのみならず此の大將軍家を環繞する大小の侯伯家も亦之に準じたりし也。否天下を擧て之に準じたりし也。恰も是千草の花の秋の野に亂發したるが如き觀ありき。又紅葉の錦の萬岳千山に織り掛けられたる如き眺わ

りき。萩の花も發きたりし也。尾花も發きたりし也。葛花も、瞿麥の花も、藤袴も、女郎花も發きたりし也。而も其燦爛錦の如き文化の野が竟に元祿の燦爛錦の如き文化の野と同しからざりしは注意すべきの現象なりと謂ざるべからず。元祿の文化は豪縱を特色としたれども、寛政の文化は却て信條あるを特色としたりし也。元祿の文化は放逸奢泰を特色としたれども、寛政の文化は却て奢侈驕佚を特色としたりし也。元祿の文化は疎枝大葉を特色としたれども、寛政の文化は却て部分の詳密を特色としたりし也。元祿の文化は雄華を特色としたれども、寛政の文化は却て清新を特色としたりし也。元祿の文化は進むを知りて退くを知らざるを特色としたれども、寛政の文化は却て背後を忘れざるを特色としたりし也。元祿の文化は正邪を標準とせずして あらきとあらからざるとを標準としたれども、寛政の文化は却てあらきとあらかさるとを標準とせずして正邪善惡を標準とするを特色としたりし也。元祿の文化は群雄並び起て統一する所なきを特色としたれども、寛政の文化は却て整然たる秩序統一に就くを特色としたりし也。元祿の文化は現世を愛好するの餘り後圖心貯蓄心に富まざるを特色としたれども、寛政の文化は却て因果を思ひ後圖心貯蓄心に富むを特色としたりし也。元祿の文化は爭て一流一派の旗幟を飄して、一藝一能の唱首となり、發起者となり、開拓者となるを特色としたれども、寛政の文化は却て事業に因據あるを貴び、競て一流一派の祖述者となり、興復者となり、弘擴者となるを特色としたりし也。元祿の文化は若々しきを特色としたれども、寛政の文化は却てまめ〳〵しきを特色としたりし也。元祿の文化は無邪氣なるを特色とし、無分別なるを特色としたれども、寛政の文化は却

で、用意あり思慮ありて理窟多きを特色としたりし也。元祿の文化は雄大なるを特色とし、放膽的なるを特色とし、創作的なるを特色としたれども、寛政の文化は却て精緻なるを特色とし、細心的なるを特色とし、考證的なるを特色としたりし也。是の故に均しく粲爛たる文化なからも、彼に春光の駘蕩たる氣象あるに對し、此は秋天の蕭蕭たる氣象を帶べり。白川樂翁侯の所謂『今樣流行の染摸樣の類は至てかすかに、至て小さく、色も目だゝしからず地は打ちあがりて若輩ならず、且損せずして久しく保つと云ふを好む。是れ風俗の年寄りて身持氣質となりし也。謂へば倹より吝嗇の心甚し。されば妓樓に登り酒池肉林の樂みをなし、一夜に千金を投げ散らしたるは昔咄しにて、今は言も巧にし、僞りてもたゞらかして一夜の樂みをなし、金銀を投げ散らさずして樂むを上策とは思ふ也。されば今の奢侈は又古へと事かはれり。』なるもの、則ち明に之が特色の說明に非ずや。加ふるに文政以降は、名にし負ふ寛政の新政も徒に形式を存して之が精神を失ひ、表面と裡面との間に晝夜白黑雲ならざるの差別を生じ、虛禮虛儀の太だ盛なるに反して、內部の腐敗は其極に達し、奢侈は增大し、賄賂請托は盛に行はれ、危亂衰頽の機は早くも已に文恬武嬉の袂に掩はれつゝ漸く之が成熟の域に向はむとしつゝありたりき。是亦時代に緊肅の色彩を添へたる一因ならずむば非ず。而して財政は第一着に屈を告げり。乃ち惡貨の製造は開始せられて、文政元年に二分金を鑄り、文政二年に金銀の改鑄をなし、文政七年には一朱金を鑄れり。天保三年には二朱金を鑄れり。同く五年には二分金を鑄れり、同く六年には當百錢を鑄れり、同く八年には五兩判及び二分銀を鑄れり。例に依て天災地妖は其衰頽を助勢せり。文政二

年に畿内近國の地震あり。同く九年に諸國の凶作あり。同く十一年に越後の地震、九州の大水あり。同く十二年に江戸の大火あり。其翌天保元年に京都の地震あり。同く四年には大風ありて、米價は騰貴し、窮民は蜂起せり。同く九年には江戸に火あり。同く七年には天下大に飢え、同く八年には流民都下に聚りて餓莩衢に滿ち、遂に中齋大鹽平八郎をして席旗を飄して大坂に崛起せしむるに至れり。德川氏の日本も、今は全く秋風肅殺の天に向ひたりし也。

去れば寛政の文化は次第に凋落し、當年の遺老としては儒家に佐藤一齋ありき。松崎慊堂ありき。又賴山陽あり。國學者に平田篤胤ありたり。畫家に岸駒ありたり。渡邊華山ありたり。詩人に梁川星巖ありたり。俳客には平俗纖弱なる成田蒼虬、櫻井梅室の徒ありたり。蘭學者には高野長英ありたり。吏人としては駿河守矢部定謙ありたり。

而して賴山陽の「日本外史」が此の間に作られ、以て維新改革の日に於ける原動力の一となり、平田篤胤の主張が此の間になされ、以て王政復古の日に於ける原動力の一となり、高野長英渡邊華山の獄が此の間に起り、以て安政開國の日に於ける曉鐘の一となりたるを觀れば、時運が漸く江戸政府に對して鼎の輕重を問はむと欲したるを見るべき也。

是の時に當り、空拳を張りて頽日を廣淵に回さむと欲したるものあり。言ふまでもなく越前守水野忠邦是也。天保の天下を轉じて享保の天下に復さむとし、享保の天下に復す能はざるまでも、之を寛政の天下に復さむとしたるは則ち實に彼なりき。彼は天保五年出羽守水野忠成が歿したる後を承けて本丸の老中に移り、同く九年愼德公家慶が新に將軍となりたる歳を以て、乃ち天保改革の令を發したり

し也。天保九年閏四月十日の節儉令は之が手始となりて幾多の改革令なるもの雨の如く降下したり。極めて嚴勵なる改革の手は容赦なく之が實行を天下に責めり。白川樂翁の親を以てし、白川樂翁の德望を以てし、白川樂翁の手腕を以てして、猶且つ之を寛政に全ふする能はざりし改革を、彼は樂翁の親なく、樂翁の德望なくして、之を天保に全ふせむと欲したりし也。其失敗に終りたるも是非なき次第と謂ふべし。

試に當年に於ける幕府の歳計なるものを見よ。天保十三年の歳入は合計百十萬千四百四十五兩、歳出は百六十三萬五千二百八十八兩にして、五十三萬三千八百四十三兩の不足あり。米租は五十七萬七千七百餘石、出す所は五十七萬四千三百五十石の有餘あるのみ。幸に五十五萬七千三百二十三兩の金銀吹替益納即ち所謂貨幣改惡料ありて、斯に僅に之が不足を補ひ得たるに過ぎず。幕府の存立が早く已に財政の上より否決せられつゝありたるや知るべき也。是れ水野越前が諸侯の國替の策して之を救はむと欲したる所以なりしなるべし。而して彼が改革の敗るゝと共に德川氏は永く財政上の不信任を解除すると能はざりし也。財政上の不信任を解除すること能はざるの日に於て、忽ち浦賀海口に於ける『黑船來』の警報に接したりし也。江戸政府の瓦壞は竟に是れ其所ならざるを得ざりき。」

要するに寛政時代は、明和天明の後を承け、天保弘化の前をなし、寛政文化を中心として近世文明の一大開展を見たる時代なりし也。而も其一たび明和天明の墮落を經、天保弘化の衰運を前に控へたるを以て、之が文化には自ら粲々爛々たるか中に何となく秋成の態ありたりし也。緊肅の意ありたりし也。是の故に白川樂翁の手の假りて

政治上に發露したる大精神は、則ち實に此の時代の大精神なりき。此の時代の大精神が發して、學風の統一となり、正邪善惡の判別となり。信條の設定となり、因果應報の考慮となり、精緻周匝の理窟となり、清新趣味の愛好となり、秩序格式の敬重となりたるもの、則ち實に此の時代の思想界に於ける中央潮流なりき。而して此の中央潮流に乘し、白川樂翁か廟廊の上に立て其手に行ひたりし精神を、江湖の遠きに處して之れを其筆に發揮したりしもの、之を瀧澤馬琴其人となす。白川樂翁か現實界に寛政時代の日本を代表したりし如く、思想界に寛政時代の日本を代表したりしものは、則ち實に彼れ瀧澤馬琴ならずむは非ざりき。

（馬琴）

隱れとも知あたなりき笠の名はあらはれしあめの下はも

第一章、彼は如何なる人なりし乎

（馬琴の生涯）

寛政日本の中央思潮を代表したる瀧澤馬琴！彼は竟に如何なる生涯を有したるものなりし乎。

（一）瀧澤家

武藏州の北、東寧河の南、上下野州に接するの地、之を名にし負ふ埼玉の郡となす。郡の北境下村君村より南の方百間村に至る百八十村及ひ西隣大里郡の二村を合せて昔年の太田の莊也。文政の當時月に對して、

茅に萱にみがゝれ出るさい玉や

太田の里の秋の夜の月。

俯して思ひ仰ぎて三世をふる里の

と歌ひたりし彼れ瀧澤氏馬琴の家は、實に此地を其故郷としたるものなりき。

瀧澤家はもと源姓にして世々三河の長澤松平家に仕へたるもの也。天正中主家と共に東に徙り、後智惠伊豆信綱が武州入間郡河越城を有ち、四子堅綱を埼玉郡志多見村（有名なる不動岡の西に在り）下の村（志多見村の東隣）明願寺村（下の村の東隣）に分封するに當り、瀧澤家の二祖先たる大右衛門は隨て之が冢宰たりき。大右衛門の子は運兵衛興也。興也二女ありて男なく、同郡川口村（志多見村を東に去ること若干里、鷲宮村の北隣に在り）の眞中全直の三子佐仲興吉を養ふ

て家を繼かしむ。川口村志多見村下の村明願寺村等皆古の所謂太田の莊に屬し、古昔源三位頼政の三子駿河守廣綱が之を領して太田氏と稱したる所也。眞中氏は實に頼政の勇臣猪早太（藤原氏、遠江權守藤原爲憲の後）の子間中隼大守直の後に出つと云ふ。去れは瀧澤家は是より轉じて慓悍勁烈なる坂東武者の血を傳ふることゝなりし也。而して佐仲興吉は、精細縝密にして吏務の才あり、事を執て克く勵精に、克く恪謹に、領内の民其惠に浴したりき。又一方に多少の文學趣味をも有し、好て和歌俳句を爲せり。之を實に馬琴其人の祖父となす。有德將軍惇信將軍の時代に當れり。

興吉の子興滅、享保十年を以て生れ、初大右衛門と稱し、後運兵衛と曰ふ。果して坂東武者の見孫たる勇悍勁直の風を顯はし、弓劍を善くし、兵法に通じ、少壯劍を負ふて天下を周遊し、往て小笠原佐

渡守に奥州棚倉に仕へつゝありたり。後父老ゆるの故を以て江戸に歸り、家を繼て同く松平家の冢宰たりき。而して彼の勁直にして勇斷なる、一竟に其主信成の容るゝ能はざる所となり、明和中追はれて深川高松通淨心寺の門前に處り、安永四年三月廿六日年五十一を以て歿せり。法名を便譽頓覺成正居士と曰ふ。瀧澤家累代の墓地たる小石川茗荷谷の深光寺に葬むる。其長ずる所專ら武事に在りたれども亦一方に排諧の嗜なきに非ざりき。是れ則ち馬琴の父也。

馬琴の父の兄弟には、田原忠興あり、四郎左衛門と稱し、米岳と號し、本所林町に於ける一武家に仕ふ。兼子定興あり、新左衛門と稱し、親賀と號し、船手組の同心たり。

馬琴の母は吉尾氏、門女、細川家の臣吉尾門左衛門の三女にして、寛保三年江戸鐵砲洲の細川邸内に生れ、夙に父を喪ひて、父の弟松澤權右衛門の養ふ所となりつゝありたるもの也。權右衛門は棚倉藩小笠原家の士。運兵衛興戚か來て棚倉に仕ふるに當り、寶暦六年彼女が年十九の時を以て之を彼に嫁せしめたり。而して彼女は寶暦九年に於て彼との間に長子左馬太郎を擧げ、後二男吉次郎簑之助を擧げしも皆夭して、明和二年に四子常三郎を擧げ、明和四年に五子左五郎即ち馬琴を擧げ、同く六年に長女蘭、安永元年に次女菊を擧げ、年卅八を以て夫を喪ひ、寡居十一年にして天明五年六月十六日を以て歿せり。年四十又八也。亦茗荷谷深光寺に於ける興戚の墓側に葬むる。法名を海譽知覺慧正大姉と曰ふ。性慧敏にして才氣あり。幼より孤にして十分の教育を受くる能はざりしも、常に文字を喜びて古き冊子物語より草双紙淨瑠璃本に至るまで之を讀み、好で其子女に昔語りをなしたりと云ふ。加ふるに彼女の姉もせ女、彼女の父門

左衛門兄弟、亦皆相應に文字の才を有したるものなりしと云へば、彼女の家が固より文字に親みあるの家なりしこと知るべき也。

而して此の母と此の父との間に生れたる五男二女中、長子左馬太郎は、父が年卅五、母が年廿二の日を以て生れ、安永四年父歿するの歳直次郎與旨と稱して幕士戸田大學頭に仕へ、後大右衛門又臺右衛門と改め、天明四年大學頭の子下總守忠諏が甲府勤番の支配頭として甲斐に適くに隨ひ、翌年江戸に歸り、更めて山口勘兵衛忠良に仕へ、寛政十年に至り、八月十二日年四十を以て歿せり。法名は深譽勇遠羅文居士。同く茗荷谷の深光寺に葬る。二女あり、共に早世す。彼軀幹偉大、資性篤實にして、記憶力に富み、人に接する温厚にして自ら長者の風ありき。其一朝病に臥すや、藩邸の下人蒼頭等爲に社を結ひて窃に之が平癒を神佛に祈誓せりと云ふ。其人と爲り想ふべき也。生平好て俳諧を爲し、東岡舍羅文と號し、俳書二百餘卷を藏せり。其病中秋風の吟に曰く、

秋風や秋を手わけの森の陰。

旅中の吟に曰く、

遠近の春をかくして雪の空。

四子常三郎は父が年四十、母か年廿八の時に生る。即ち世俗言ふ所の四十二の二つ子なるより、夙に鈴木三太夫牛後が姓を冒して鈴木常三郎と曰へり。牛後は柳生家の士也。江戸木挽町に住し、母の姉吉尾氏もせ女之に嫁せり。而して彼は年十四にして出て、高田氏を繼ぎ、改めて清次郎と曰ひ、年十八にして幕士蒔田家に仕へ、名を興春、又廣厚、字を仁藝と稱し、天明四年瀧澤家に復歸したる頃より高井土佐守及び水谷信濃守に仕へ、改めて初右衛門と曰ひき。天明

六年八月四日を以て歿せり。年僅に二十有二也。人と爲り仁慈温良にして機才あり。狂歌を好みて緣原近勝を戲號し、俳諧を學びて已克亭好を又鶴忠と曰ひ、日頗る文藻に富みたりき。而も世を早ふして遂に大成を見ること能はざりし也。

馬琴の女弟二人は、長女を蘭と曰ひ、伯母もせ女の斡旋に由り天明六年年十八を以て崎山某に嫁せり。次女を菊と曰ひ、田口某に嫁せり。

此くの如き瀧澤家の父子弟兄中に在りて、一方に父の長大魁偉にして武骨稜々たる體格と父祖以來の精細周密にして限りなく強き氣魂とを傳へ、他方に母方の才氣と文藻とを傳へて、以て兩系統の血を聚めたる一種の怪偉的人物を作り上げたるもの、是れ實に瀧澤馬琴なり。

(二) 驕悍兒

後櫻町帝の第五年、江戸第十世俊明將軍家治の第六年、明和四年丁亥夏六月九日の曉に於て、江都深川高松通淨心寺門前の浪士瀧澤家に、一男兒の新に擧げられたる者ありき。是れ後年の瀧澤馬琴其人にして、一方に父運兵衛興祐が年四十三、母吉尾氏門女が年三十、長兄左馬太郎が年九歲、次兄常三郎が年三歲の時に當り、斯の小兒の未來の友たる下野の蒲生君平秀實が三歲、江戸の山東庵京傳が一方に七歲の時也。恰も是れ江戸中興の英主享保將軍の政漸く墜ちて、將に安永天明の墮落時代を啓かんとしたる日に當り、天明の權臣田沼意次は是歲を以て側衆より側用人に進み、財政は漸く急にして當四錢は新鑄せられ、勤王の士は始めて起り、山縣大貳藤井右門等の刑死と

なれり。去れば此時新に左五郎と字せられたる瀧澤家の小兒は、徒に健强の體軀を以て、反て家勢の衰頽に向はむと欲するの日に生れ、兼て世運の衰頽せむと欲するの日に生れたるものなりき。

而して此の小兒が二歲にして、後年の清新派旗幟を和歌界に颯したる景園香川景樹が生れたりし其翌明和五年は、事なく過ぎ、國學界に於ける復古派の文豪縣居賀茂眞淵が歿し、帝國蘭學の發見者たる文藏青木敦書が歿し、山東京傳の義弟にして後年彼と甚だ相善からざりし山東京山が生れ、廟廊の上に在りては主殿頭田沼意次が側用人より進て老中格となりたる明和六年には、八月大風雨ありて、彼が家も驚かされ、之が爲め去て靈岸寺門前に僑居するの已むを可らざるに至りき。唯十一月に於ける長妹蘭女の誕生は少しく一家の愁眉を開かしめたるのみ。殊に中納言田安宗武が歿し、碩學松崎明復慊堂が生れ、後桃園帝の新に天位に即かせ給ひたる明和八年には、再び近火に驚かされて淨心寺門前の舊宅に復り住み、轉移愈屢にして、家計は愈其急を增さざるを得ざりき。

其翌安永元年文化文政の宿儒たる佐藤坦一齋が生れ、田沼意次が老中となり、二朱銀が新に鑄られ、江戸は明暦以後の大火に逢ひ、彼か家に在りては次妹菊女の誕生を見るに至りたる時に及び、彼は早くも年六歲の碗白兒となり、流石に武健なる父與藏すらも殆ど之を持て餘まして、彼は子に非ずと呟きたることとありしと云ふ。唯文字に對する嗜好は不思議にも夙に發達し、此頃已に字母を母に學びて物の本を拾ひ讀みするに至りたり。加之父が俳句を好みて兄に敎ゆるを慣ひ聽き、七歲の春に、彼は早くも鶯の庭に來鳴くに對して、

さくらひすの初音に眠る座頭かな。

の句を吐き、以て聞くものをして舌を巻かしめたりと傳ふ。所謂蛇は一寸にして其氣を吐くものに非ずや。

斯くて彼はころゐ(虎列拉病)の初めて大流行をなしたる安永二年に、年七歳を以て小柴長雄に書を學べり。長雄は深川八幡宮の鳥居前に住し、三井親和風の書を能くしたるもの也。

江戸の大川橋を架したりし其翌安永三年に、父と一面の識ありたる建部綾足は歿し、女俳家加賀の千代尼も歿し、彼は兄と共に觀來がたる演劇の筋を母に語りて、其强記を驚かれたることありき。

其翌安永四年彼れ左五郎が年九歳の日は、實に瀧澤家に取りて一大打擊の時なりき。世は麗かなる春に醉ふの間に在りて、彼が家の主人たる運兵衛興滅は春風三月十六日に永劫不覺の眠に落ちたれば也。

さらても生計の急を告げつゝありたる瀧澤家の窘窮知るべきのみ。而も母子手を束ねて徒に茫然として在るべきに非ざれば、氣丈なる母は傳手を求めて長子左馬太郎を幕士戸田大學頭に仕へしめ、共に濱町の戸田邸に移りき。左馬太郎時に年十七也。元服して直次郎興旨と曰へり。

一家の變轉此くの如し、彼れ左五郎も亦學で小柴氏に在る能はず、歸て家に處り、父の歿後は驕悍益甚しく、殆ど制すべからざらむと欲したりき。而して其文筆に對する嗜好は依然として繼續したるのみならず、寧ろ齡と共に長じたりき。其曾て一力士より好力士たるに足るべしと相せられたりし躰軀と共に長大したりき。

安永五年鈴屋門の猛虎と呼ばれたる平田篤胤か生れ、高名なる畫家池野大雅堂か生れ、諷刺家の巨臂式亭三馬が生れたりし年の夏、彼

は年十歳を以て初蟬を歌へり、

門々の菖蒲は枯れて蟬の聲。

と。而して其翌安永六年田沼意次の威權漸く盛なる頃、彼は傍ら書賈の爲に筆耕をなし、之が代に書を借り、以て印行淨瑠理本の多くを讀み盡し、又和漢今古の軍書實錄等を貪り讀めり。

翌安永七年彼か年十二の時、其の將來の師友たる山東京傳は年十八を以て初めて戲作に筆を染め、彼が次兄常三郎は改めて清次郎と稱し、出でゝ高田某の養子となりき。獨り彼は依然として傲岸不屈の舊態を繼續したるのみ。未來の大文豪たる彼れ馬琴は、實に此くの如きの持て餘ましものとして之が生涯の序幕を開きたりし也。

(三) 無賴の年少

驕悍兒としての生涯に次て、無賴の年少たる生涯は開かれたりき。」

瀧澤家の新主人たる直次郎興旨は、資性忠厚にして戸田家に仕へて主家の喜ぶ所とならざるに非ざれども、猶二十に滿たざる新參の士也。勿論祿豐かなることを得ざる也。安永八年已に十三の春を迎へたる彼れ左五郎なるもの、復た何ぞ悠々として久しく家に坐食するを得むや。彼は初めて出されて一武家に仕へり。或は曰ふ、彼年十二三の頃御典醫兒島春庵の小僧となり、其主の爲に根岸肥前守の家に使し、途上肥前守の隨筆「耳袋」を偷み讀みて之を記したりと。肥前守は有名なる江戸南町奉行となり、文化十二年に年八十を以て歿したる根岸鎮衛是也。而して此の安永八年は、朝廷に在りては後桃園帝の崩御あり、幕府に在りては有德時代の遺老たる老中右近將監松平武元逝きて田沼專制の天下となり、民間に在りては一代の物產學

者にして兼て一大闊俗家たりし鳩溪平賀源内國倫が歿し、北山山本喜六が「作詩志殼」「作文志殼」を作りて、折衷學の井上金蛾等と蘐園派を排擊したる歳なりき。

當時彼の主人たりし一武人は、一日『心からこそちがまさりすれ。』の句を示して、之が上の句を附けしめ、彼は乃ち

かよひ來る千里のみちもひといきに、

と附けたることありしと云ふ。

而して是より先久しく驕悍兒として在りたる彼れ左五郎は、竟に永く他家の小者として安處すること能はざりき。翌安永九年冬十月一句を其居室の障子に題して脱走し去れり。時に年十四也。其句に曰く、

こからしに思ひ立ちけり神の旅。

と。彼が無賴の年少たる生涯は、是日よりして漸く其端を發せむと欲したりし也。

兄興旨之を聞て急に人を遣はし、追ふて之を拉し歸らしめり。是歳近代の明天子光格帝は新に位に即き、賴家の山陽外史は初めて生れき。

翌くれば天明元年備前の常山湯淺元禎が生れたりし歳、彼は年十五にして俳文「吊鶯辭」を作れり。當時彼が專ら意を俳諧に用ゐ「風俗文選」の如き、其最も愛讀するものゝ一なりしことは、此等の俳文にも其痕跡を見るべしと云ふ。

斯くて天明二年は來りて、塙保巳一が「群書類聚」を成功したるの歳、田沼意次と相善き出羽守水野忠友は老中並勝手掛となり、尋て天明三年は來りて、一流の折衷學者たる片山兼山は歿し、俳詩の一振者たる與謝蕪村も歿し、俳文の大家たる横井也有も歿し、掉尾の淨瑠

璃作者たる近松半二も歿し、「田舍源氏」の作家たる柳亭種彦が生れたる歳、恐怖ずべき淺間山の大破裂ありて、農民は飢渇し、所謂打壞しなるもの行はれたりき。更に天明四年は來りて、折衷學の井上金峨が歿し、考證家の伊勢貞丈が歿したる歳、新番善右衛門佐野政言は威權赫々たる田沼意次の子若年寄山城守意知を營中に斬て死を賜ひ、さしもの田沼時代も最早一葉の秋を告ぐる時となりき。此の間彼れ左五郎は志を立てゝ醫師とならむと欲し、歳且の句として『蓬萊に置あまりけり月と花』と歌ひたりし天明二年に、頭を剃りて山本宗洪の塾生となりき。宗洪は御殿醫にして二百石を領し、住して神田小川町に在りたるもの也。當時兄羅文興旨が之を賀するの辭に曰く、

百草の頭數なりふきのたう。

と。而も彼は亦醫々として久しく藥切りを事とするに堪ゆる能はざりき。寧ろ去て俳とならむと欲して果さず。更に去て俳諧師とならむと欲し、遂に追はれて兄の家に歸り來れり。

而して彼は其髪を伸びしむるが爲暫く伯母婿鈴木牛後の隱宅に閉居し、彼が早時の一知己たる伯母もせ女の厄介となり、俳書並に「方丈記」、「太平記」及び黄表紙の類を讀み、若くは寫し、若くは千蔭樣の筆跡を學び、以て其髪の長ずるを待ちき。伯母もせ女は、彼が幼より我慢者强情者として持て餘まさるゝ中に在りて獨り彼を愛し、其氣力の健かなるを稱し、其才智の逞しきを喜び、常に彼の母たる其妹に語りて『這ふがまゝに這はせ見よ』と言ひたりしもの也。

既にして彼は天明三年元服して左七郎興邦、字を子翼と稱し、再び出てゝ一武家に仕へり。此の前後に於て、彼は諸子百家の書より源氏狹衣等に至るまでを渉獵せずと云ふことなく、好て俳句を作り、

又仲兄興春と共に狂歌を弄ひたりき。自ら號して鳥水、亭々亭、馬琴等と曰ひ、狂名を山梁貫淵と稱せり。

歲旦

先ひらくものあり花の初暦。

春興

七草をみごとにうちぬひたり利。

師竹菴吾山評兼題露

わかれてはひとつになるや露の玉。

天明三年の吟

澁柿や汝ぞしらぬさかひ瞻。

うす月を見なくすごやや初氷。

等の句は皆是歲の作に係り、

歲旦

月雪の友まづ來たり花の春。

歲暮

年波の底に寄する歟魚の店。

等の句は天明四年の吟に係る。吾山は武州越が谷の人、彼等弟兄の師也。

天明四年八月瀧澤家は再び小變動に遭へり。家長興旨は其主下總守忠誠(大學頭の子)が甲府勤番の支配頭として去るに從ひ去り、留守宅は此頃高井土佐守に仕へつゝありたる清次郎興春之を見廻はり、木挽町の伯母及び興旨が同僚隣人皆心を添へて多病の母を慰藉しつゝありたり。而して興春亦甲府に至る道の記を作りて之を母に贈り、以て其無聊を慰めり。長女蘭は出てゝ戸田家の同族戸田大炊頭の奥

方に宮仕じ、名を市と呼べり。獨り其行動の依然として母の憂をなじたるは、則ち彼れ左七郎興邦のみなりき。

兎角する間に天明四年は暮れて天明五年は來れり。母の病は漸く重く、興春は之が看護の爲多く瀧澤家に在りたるより事起りて、高田家を辭せり。而して實家に復歸せり。興旨亦遠く甲府より來て之を省せり。而も彼女の病は終に起たざりき。六月十六日彼女は心靜に遺言し、更に五子に訣して臨終正しく逝けり。實に左七郎が年十九の夏なりとす。斯く貧しきが中にも猶金二十二兩三分を遺して、之を五子及び親族に分ち、衣類其他に至るまで精細に分記して之を各其贈遺する所に贈遺したりし彼女が、如何に勤儉に、如何に周到に、如何に思慮深き婦人なりし乎は之を知ること難からざるべし。生來の我慢者ながら、一流石は至情に富める彼れ左七郎は、此時喪に在りて左の如く歌へり、

身ひとつの秋がとぞ思ふとの秋も、
むしのともねはかはらざりけり。

斯くて興旨は是歳改めて山口勘兵衛直良に仕へ、左七郎は之を慶して、

今年よりのぼるへき身のしほりして
まづ山口に引うつりけり。

と歌ひき。是れ高名なる肥後の銀臺侯細川重賢の歿したる年也。此頃彼は仲兄興春と同じく小石川柳町に寓し、好て狂歌を賦しつゝありたりき。

其翌天明五年は、世間に在りても、彼が家に在りても、頗る記憶すべき大事凶變に富みたるの年也。江戸の大水ありたるも是歳なれは

也。大饑饉も是歳なれは也。御用金を課せられて誹謗の紛起したるも是歳なれは也。大將軍俊明公家治の薨したるも是歳なれは也。老中田沼意次の職を解かれたるも是歳なれは也。而して瀧澤家に在りて、長妹蘭女の結婚により、弟兄三人結納を開きて酒を酌み、彼は筆を引きて

妹か爲に祝するめの酒ひらき

どうも家樽ものにざりけり。

と狂歌したるも是歳なると共に、秋風八月第四日を以て仲兄興春が俄に病みて歿したるも是歳なれは也。而して彼は此の頃又もや其主を換へり。

翌天明七年は時勢一轉の歳也。前年に至りて極まりたる頽運は、餘勢是歳に及びて米價の騰貴となり、所謂打壊しなるもの江戸大坂其他にさへ行はれたりしも、他方には文恭公家齊新將軍となり、越中守松平定信は老中の首席に坐し、本多忠籌、加納久周以下を採用して、大に弊政を改革したりき。而して俳客大島蓼太は是歳に歿せり。岩瀬京傳の『通言總籬』は是歳に著はされたり。當時某侯に仕へて切米の外月俸三口を給せられつゝありたる左七郎馬琴も是歳春年廿一を以て「俳諧古文庫」を編集せり。「俳諧古文庫」は「風俗文選」に倣摸し、自作の文章及ひ師吾山羅文鶴忠二兄並に其友の俳文を集めたるもの也。此の頃彼か最も力を用ゐたるは俳諧にして、彼は自ら俳諧師たらむことを期したりし也。而も彼が師吾山は反て彼を評して曰ひき、『此の人博覽强記なれど、其を悉く句の上に顯はして人おどかしのみ努むるは、風雅の旨にかなはず。發句は深切率直にてありたし。俳諧に於ては兄の方風骨優れり。』と蓋し適評なりしなるべし。」

是歳冬十二月十七日彼等が俳諧の師たりし法橋師竹菴吾山は年七十餘を以て歿せり。其小祥忌に彼れ馬琴は歌ふて曰ひき、

埋火や二十日に近き冬杜丹。

既にして彼れが『去年今年いく世祖來の松飾り』と歌ひて迎へたりし天明八年は來りて、前代の田沼意次は歿し、儒者太室澁井孝德も歿し、儒服せる政治家柴野栗山は出でゝ幕府の儒官となり、智惠伊豆の兒孫たるに耻ちざる松平信明は老中となり、越中守の新政は着々實行を見たり。從て天明の墮落時代に伴へる無頼の年少たりし彼が生涯も亦漸く終に近つきたると共に、寧ろ其甚しきものとなりき。彼は又もや其主に逐はれたれども、彼が早時の知己たる伯母は既に歿し、兄興旨は寛政元年に妻を迎へ、彼が四圍の情況復た昔日と同じきことを得さる也。是に於て彼は或は龜田鵬齋の從僕となり、或は狂歌を石川五老に問ひ、或は深川仲町に僑居して書賈の爲に筆耕をなし、遂に筆を戲作に染めりしも意を得る能はず、去て京阪に遊はむと欲し、落魄神奈川に至りて、一僧の病中代て兒童に習字を教へ、以て其口を糊したることありたり。

昨は北廓の花に對して、

流れてはこゝも妹背の中の町

よし野の花のよしやよし原。

と狂歌し、今は神奈川の驛頭に頑童を侶とす。彼が當年の生活想ふへきのみ。

(四) 著作者としての前期

武士たらむと欲して武士たらず。醫家たらむと欲して醫家たらず。俳

諧師たらむと欲して俳諧師たらず。人に仕へむと欲すれは生來の我意我慢は容易に其腰を折らしめず。事を營まむと欲すれば一絲半錢の資あるなし。有する所は童年以來餓虎の肉に對する如くに貪讀し亂讀したる無數腦底の雜書あるのみ。彼は寔に斯の雜學雜書を以て自ら其身を立てざる能はざりし也。

新なる時運と共に、前代の戯作家戀川春町は歿し、未來の大詩人たる梁川星巖は生れ、西野の市河寛齋は江湖詩社を結びて大に清新派の詩旆を揚げたりし寛政元年は、忽ち來れり。而し忽ち去れり。而して彼年廿四の寛政二年は來れり。是歳春深川永代寺に辨財天の開帳ありて壬生狂言の觀物滿都の大評判となりたるを機とし、彼は始めて其唯一の資本たる腦底の雜學雜書を利用し、以て時の所謂戯作を試み、「廿日餘五十日餘盡用而三分狂言」二冊を著せり。而して之れを出板せむが爲に芝神明前に於ける書肆甘泉堂の番頭の紹介により、是秋岩瀬京傳を其銀座二丁目の家に訪へり。是れ兩者が初めて相見たるの時にして、後年彼が記して、

是の歳の秋、馬琴初て京傳に逢ふ、一見して舊知の知し、其好む處同じければなり。京傳は寶暦十一年辛巳秋八月十五日深川木場なる典物舗に生れたり。(是歳三十歳也)馬琴は明和四歳丁亥夏六月九日深川淨心寺近傍なる武家に生れたり。(是歳二十四歳なり)其幼少の日居る處遠からず、僅に相去ること數町に過ぎざれども、其蒙師同じからず(京傳は手迹を深川伊勢町邊なる御家人行方角太夫に學びたり。この人は御家流にて、私に手迹を指南したりと。馬琴は深川八幡一の鳥居邊なる蒙師小柴長雄に學びたり。この人は三井親和の高弟なりきと)。且つ武家と町家の差別あるを以て相識

らざること二十餘歳。この日各舊里を告るに及て、互に拍掌して奇遇とせり。是を以て其交り疎からず。

と云へるを觀れば、二人が初對面の狀況想ふべき也。

而して書は、京傳門人太榮山人の名を以て芝の甘泉堂即ち和泉屋市兵衛の手に出版せられたりき。而も彼が待ちに待ちたる世上の反響は寂として聞こゆる所あらず。自負心に富むの彼たるもの焉ぞ其望を失はざるを得むや。彼は則ち直に其筆を擲ちて安處の地を京阪に覓めむと欲し、一朝飄然として花の大江戸を背にし去れり。其往て神奈川宿に滯逗し、寺僧の爲に代て小兒の習字を督したりしは實に此の日の事に係る。時に寛政三年の春也。

是歳九月四日風雨大に起り、深川洲崎邊は海嘯に洗はれ、災害は深川全體に及べり。事神奈川に聞こえければ、彼は驚きて江戸に歸り、

趨て深川の寓所に如けり。而して彼が寓所は此時殆ど住み難きまで荒らされたりき。流石の彼も悵然として去て永代橋畔の一旗亭に宿し、忽ち京傳が法に中りたるの噂を耳にせり。蓋し寛政の新政は、前年(寛政二年)五月異學禁止の命を出して天下の儒學を程朱派に統一せむと欲したると同時に、書物草紙に關する町觸を出して思想の墮落を防がむとし、花街小說たる洒落本の如き、首として之が出版を禁したり。然るに彼れ京傳は猶敎訓讀本の名の下に洒落本「錦廼裏」「仕掛文庫」等を作り、日本橋通油町書肆耕書堂蔦屋重三郎をして出版せしめたるより、是の夏所罰せられ、京傳は手鎖五十日、重三郎は身上半減の闕所、地本問屋行司二人は商賣差止の上所拂の刑を受けたり。之を耳にしたる彼れ馬琴は、其翌直に京傳を銀座の閉居に訪ひ、遂に其勸むるがまゝに、留りて京傳の家に寓し、爲に「實語敎幼稚講釋」

三卷、「龍宮聳鉢木」三卷(京傳趣向)を代作し、其翌寛政四年春山東京傳の署名を以て之を出版せり。是れ彼が新生涯に入るの初にして、是より彼は意を決して著作を以て身を立てたるのみならず、全く新時代の精神を精神とし、能く其素行を改め、之が著作の如きも始より已に勸懲的結構のものなりき。『解(彼の實名)不肖と雖、年廿五の時より志を改めて行狀を愼みつ。』とは、彼が後年自ら語りたる所に非ずや。」

是歲十二月廿七日兄羅文與旨は其主山口直良に隨ひて大阪に如き、翌年伊勢内外宮に詣でゝ、正月廿七日に歸京せり。此時彼之を送りて曰く。

見て來ませ浪華の春の花の兄。

寛政四年俄艦來て蝦夷に到り、當年の識者林子平は「海國兵談」「三國通覽」を著して、日本橋下の水が俄羅斯にも和蘭にも通じつゝあるこ

とを說き、松平定信は自ら房總豆相の五國を巡視し、監察石川將監、村上大學は蝦夷に遣はされたる歲に於て、俳客加藤曉臺は歿し、式亭菊池三馬は年十七を以て初作を試み、京傳は所刑以來謹愼第一の人となり、是歲五月書畫會を兩國柳橋萬八樓に開きて三十金を得、銀座一丁目に紙烟草入煙管店を開けり。彼れ馬琴は是歲春京傳の家を去て書肆蔦屋の二階に移り、「鼠兒婚禮塵刼記」三卷、「浮世街道御茶漬十二因緣」三卷、「自花團子食子物語」三卷、「荒山水天狗鼻祖」三卷を作り、又馬琴門人魁雷子の名を以て「增補伊賀越物語」三卷を作りき。初めて曲亭馬琴の名を署し、共に翌寛政五年を以て出版したり。而して是歲に出したるものには「花春風道行」ありき。

其翌寛政五年は、馬琴自身に取りても、寛政の天下に取りても頗る記臆するに足るべき歲なりき。八釜しき尊號問題なるものは起りて

大納言中山愛親、大納言正親町公明は東下し、時の首相越中守松平定信は職を辭して樂翁と號し、寛政三奇人の一人高山彦九郎は久留米に自盡し、他の一人林子平は禁錮中に歿し、能登守松平乘薀の次子熊藏は林家を繼て、述齋林衡となり、温古堂塙保巳一は和學講習所を建てたり。而して馬琴は是時蔦屋重三郎の斡旋に由り、飯田町二丁目中阪下南側の下駄商にして家主たる伊勢屋の女婿となり、清右衛門の名跡を繼けり。而も猶他姓を冒すを嫌へる彼は依然として瀧澤氏を名乘りつゝありき。

伊勢屋は會田氏。母及び一女ありたるのみ。女名は百、大洲侯加藤遠江守が作内と稱したりし當時より仕へて同邸に在り、一旦家に歸りて夫を迎へたりしも、幾はくもなくして夫を喪ひ、方に寡居しつゝありたりしもの也。是時歳三十、馬琴は時に年廿七なりき。多年の間流落生をなしたる彼も是より始めて一家の主人となり、兄氏興旨の家へも出入を許され、太田蜀山人書する所の「著作堂」三字を顔して小書齋に其筆硯を拂へり。

而も新に下駄屋の主人となりては、家務の處理、世間の付合、其他に多少の力を費さゞる可らざるを以て、未た靜に筆を把るの餘間を得ず。爲に其翌寛政六年の出版は、僅に「福壽海無量品玉」三卷のみなりき。而して此の新なる下駄屋の主人は、寛政六年早くも已に一女兒さきを擧げり。

寛政七年近世の大書家圓山應擧か歿し、「膝栗毛」の著者十遍舍島田一九か年三十を以て初作を試みたるの歳七月、彼は一朝其姑を喪へり。彼は是より私に厭ひつゝありたる下駄屋を止め、兒童を集めて讀書習字の師となり、又藥を賣り、名を解字を瑣吉と稱し、著作堂

主人飯臺陳人等と號し、次第に其力を著作に專らにしたりき。是歲「高尾船字文」五卷、「心學晦莊子」三卷、「四遍摺心學双紙」三卷を出せり。」斯くて其翌寛政八年には、家庭に於ける產物として二女ゆうを擧げたると共に、思想界に於ける產物としては、「小需雨見越松株」、「勘忍五兩黃金言語」、「曲亭增補萬八傳」、「報讐獺狂尾」、及び「賽山狐修怨」、「彥山權現誓助劍」を出し、寛政九年には家庭に於ける產物として、十二月廿七日に長男鎭五郎を擧げたると共に、思想界に於ける產物としては「無筆節用似字盡」を出し、「加古川本藏綱目」外八種を出せり。是れ實に寛政曆の頒たれたる歲也。又白川樂翁侯が「集古十種」を成したるの歲也。而して是歲五月彼が著作の出版者たる大膽にして俠氣ある耕書堂主人蔦屋重三郎は歿したりき。重三郎、名は柯理、喜多川氏、烟羅館と號し、狂歌を好みて蔦の唐丸と曰へり。當年の出版界に貢献する所少なからざりしもの也。馬琴が彼を悼むの辭に曰く、

思ひきや今日は空しき藥玉の
枕に殘るなげきせむとは。

夏菊にむなしき枕見る日かな。

又是歲三月に於ける亡父母遠忌の追薦に、彼は

二十餘年花やつもりて墓の苔。

と云へり。殊に其翌寛政十年に至るや、彼は更に大なる悲みを悲まざるべからざるの出來事に遭ひき。秋風八月十二日赤痢を病みつゝありたる兄臺右衛門興旨は、年四十を以て歿せり。彼の之を哭する句に曰く、

芭蕉忌にふた月早し十二日。

興旨が病中『芭蕉の翁、浪花津の旅宿に泄痢を患へて十月十二日に

殁し給へり。余が死も其頃にやあらむ。』と日ひたりしを憶起せる也。

百箇日に、

涙凝りて霜となる夜や卒哭忌。

伯兄の庭に植たりし桃の若木を墓の傍に移せしに、其次の年の春初めて花咲きければ、

死花のかひなくさくや桃の主。

小祥忌追薦百韻發句

ひとめくり短き紐よ笠の露。

小祥忌に墓まゐりして、

墓原や去年の烟も秋の空。

卒都婆に蟬のからのかゝりたるを見て、

秋蟬の人になかせてもぬけ哉。

同じ頃書き置ける反故をわくるとて、

なき人の朱筆や反故の下もみぢ。

言の葉にわれおく露や古懐紙。

大祥忌追薦

むかへけり三歳駒に法の門。

彼か其兄を悼むの意も亦切ならずや。而して彼が是歳の著作は「鼻下長生藥」等八部二十卷也。

寛政十一年八月興旨の小祥忌に、彼は其子鎮五郎をして兄の後を承けしめり。是頃興旨の遺女蔦か病みつゝありしを訪ふて彼は歌ひき、

蔦はまだ手をはなれずや門の秋。

と。而して彼女は亡父の小祥忌に當る翌々日を以て甫めて三歳にして天せり。次の日野送りの歸途、馬琴

命なるかな姪や三とせを秋の蝶。

彼女の母にして馬琴の嫂たる興旨の未亡人は、其後他家へ再醮せり。而して彼れ馬琴は兄興旨の歿してより復た再び俳席に列することなかりしと云ふ。

彼は是歳「繪本大江山物語」等十部二十七卷を出し、其翌寛政十二年に「繪本漢楚軍談」「俳諧歳時記」等八部二十五卷を出し、更に其翌享和元年には「繪本漢楚軍談」の續稿を初として十七部五十餘卷を出し、享和二年には「野夫鶯歌曲訛」等十二部三十六卷、同三年には「月氷奇縁」「曲亭傳奇花釵兒」等八部二十三卷、大坂の竹山中井善太積善の歿したる文化元年には「小夜中山夜啼石」等五部十五卷、文化二年には「復讐稚枝鳩」「四天王剿盗異録」等十部四十餘卷を出せり。去れば彼が文壇の名聲は早く已に大に揚り、細井平洲、本居

宣長、小澤芦菴等の歿し、島田一九の「膝栗毛」が發行せられたりし享和元年彼年三十五の時に、尾張の醫師神谷剛甫、號椒芽田樂より其著「桃灯庫闇夜七扮」の添作を乞ひ來れるありき。江戸に於ける最初の心學者中澤道二が歿し、華山渡邊登が生れたる享和三年彼年卅七の時には、浪華の人松好齋の其著「滑稽繪本役者濱眞砂」に序文を需め來れるありき。大阪の書肆河内屋の彼が著作「月氷奇縁」を出版せるありき。「續藩翰譜」成り、一九か「仇物太平記」を著して畀せられたりし文化二年彼年卅九の時には、彼の手に成りたる「復讐稚鳩枝」の淨瑠璃劇に上れるありき。其文名已に遠く關西に及び、此の前後に於て或は詩歌を求め、或は添削を乞ひ、或は來て門人たらむと望むもの多かりしも、彼は多く之を謝し、病と稱して閉居し、自ら號して簑笠漁隱と曰ひき。

而して其間彼が知識見聞を弘ふし、其文學的技能を著しく助長せしむるに與て最も力ありたるは、則ち其前後兩回に於ける旅行なりとす。前者は寛政十二年八月三女鍬を擧げたるの翌月第十日を以て江戸を發したる豆相漫遊にして、武州金澤より浦賀を經て、海路伊豆の下田に至り、天城山修善寺三島沼津江島鎌倉等に遊て、十月中旬に歸府したりき。彼が後年「朝夷巡島記」其他の著作上に發揮したる知見は、多く此日の行旅に由りて收得し來りたる所のものに係る。是れ則ち東河伊能三郎右衛門忠敬が蝦夷地測量の命を受けたる歳にして、又「孝義錄」の初めて成りたる歳也。後者は則ち享和二年五月九日江戸を發し、往復百有五日を以て八月廿四日に歸府したる京阪漫遊を是なりとす。此行彼は先づ京傳に送られて神奈川宿に至り、十日大磯に狂詩を賦して、

祐成全成大磯傳。千里高名虎御前。可ㇾ嘆衣裳群千鳥。只今有ニ出女如ㇾ雲。

と曰ひ、十一日箱根塔の澤に宿り、十五日より駿河の府中に足を留め、駿州有渡郡大野の龍華寺本堂より正面の富士を觀、六月十二日名古屋に入り、七月三日京都に入り、洛中十四日の月を仰ぎては、

あすの夜はことづてやらむ故郷の
あづまの空を出る月影。

と吟じ、嵯峨の落柿舍に

柿の木やつきばかりもるあきの籠。

と歌ひ、廿四日大坂に、八月六日再び京都に、十一日伊勢の大廟に詣で、再び海道を東に歸り、川崎に宿して

淋しさや江戸にとなりて秋一夜。

と曰へり。其結果は直に「羈旅漫錄」三卷となりたるのみならず、彼が後年「美少年錄」其他の著作上に發揮したる知見は、多く此日の行旅に由りて收得し來りたる所のものに係る。是れ則ち蝦夷奉行の初めて置かれたる歳也。

而して文化元年蜀山人太田南畝の幕命を以て長崎に之くや、彼は之を送りて曰ひき、

言さへぐ唐船の帆柱も
たちつくすべし君を待つとて。

首を回せば寛政三年彼れが年二十五を以て、其處女作「廿日餘五十両盡用」而二分狂言」を公にしてより、今茲年三十九を以て「復讐稚枝鳩」其他を公にするに至る、茲に十五年。其間に著作する所のもの一百七種、三百二十餘卷。亦多からずとなさず。彼が翌文化三年其の著「繪本血山奇談」の卷末に、門人一竹齋逢竹及び嶺松亭琴我の名を假りて自ら譏し、其性强記便敏にして、著述晝夜をすてず。起ては記し、坐しては讀、一篇の作意はにぢり書の手簡より手がるく、一帙の草藁は一旬を出ずして成、只先生の滑稽と戲編とは得て學べく、その强記と强筆とは得て一日も眞似がたしと稱したるも亦必ずしも溢美と謂ふべからず。竟に雄文達筆一代を風靡するに至りたる、固より故なきに非さる也。而も此の間や、著作者としての彼に取りては則ち僅に初期に屬し、謂はゞ修練の時代とも稱すべき時代にして、彼の彼たる本色は今未た發揮せられさりき。

(五) 著作者としての中期

彼か生涯の歩みは漸く四十年に達せり。早熟にして而かも晩成した

りし彼は、今や眞個に意義ある生涯に入り、彼の彼たる本領は斯に始めて發揮せらるべき時となれり。是より先婦女童幼の相手なりし黄表紙と稱する草双紙は、此の頃より轉して成人を相手とするの合卷となり、是より先專ら巷談を基礎として作りたる草双紙は、此頃より轉して歴史實錄に基ける讀本即ち所謂稗史となり、是より先專ら草双紙の作者なりし彼は、此頃より主として讀本の作者となりき。否、草双紙を進めて讀本たらしめしは、則ち實に彼の事業に係り、讀本は實に彼が專壇の長技なりき。

讀本の勃興は、享和三年彼が大坂の書肆河内屋太助の爲に作りたる「月氷奇緣」の世に歡迎せられたるに皷舞せられ、文化元年の作に係る「復讐稚枝鳩」、「石言遺響」亦世に行はれたるに始まり、同年の冬には更に「四天王剿盗異錄」十卷を作るに至りき。而して是亦同く世の好評を博し、尋て大坂に於て之が一節は歌舞伎劇に上れり。是に於て彼は遂に讀本を以て其大力量を天下に誇示せむと欲し、文化三年彼年四十にして、水戸の藤田東湖が生れ、國學者伴蒿蹊が歿し俄人來て蝦夷を掠め、北邊の警大に世に傳へられたりし歳に、彼は其傑作の一たる「椿說弓張月」の前編を公にしたりき。同年更に「三國一夜物語」六卷、「新篇水滸畫傳」十一卷、「墨田川梅柳新書」六卷、「勸善常世物語」五卷、「盈石血山の記」二卷、同後篇二卷、「敵討誰也行燈」三卷、「敵討裏見葛葉」二卷、「敵討枕石夜話」二卷を出版す。共に所謂讀本（内、中本と稱するもの若干）也。外に草双紙三種雜著一種を出せり。而して寛政の儒者柴野栗山が歿し、岡田寒泉が歿し、京都の皆川淇園が歿し、深川八幡の祭禮に永代橋が墜落し、俄人は再ひ來て蝦夷を掠め、松前氏は其封を收められて、蝦夷の統治は幕

府の手に歸し、松前奉行なるもの設けられて之を管したりし文化四年に、「弓張月」の後篇六卷、幷に「賴豪阿闍梨怪鼠傳」九卷、「三七全傳南柯夢」六卷、「新累解脫物語」五卷、「標注園之雪」五卷、「松浦佐用媛石魂錄」三卷、「雲妙間雨夜月」五卷、「柳巷說話」五卷、「敵討紀念長船」二卷、及び「遊君操連理餅花」等の讀本を出し、同時に二種の草双紙を公にし、加藤千蔭が歿し、並木五瓶が歿し、京傳が「本朝醉善提」を出し、英船が長崎に來りたる文化五年に、「弓張月」の續篇六卷、併に「俊寛島物語」八卷、「旬殿實々記」十卷、「松染情史秋七草」六卷、「巷談隈陂庵」三卷を出し、同時に草双紙五種を公にし、無鵬上田秋成が歿し、三馬が「浮世風呂」を出版したる文化六年に、「弓張月」の拾遺五卷、「夢想兵衛胡蝶物語」五卷を出し、草双紙七種を公にしたり。又小野蘭山の歿したる其翌文化七年には、「弓張月」殘篇六卷、並に「胡蝶物語」後篇四卷、「昔語質屋庫」五卷、「常夏草紙」五卷、「敵同志石與木枕」二卷、及び隨筆、「燕石襍誌」六卷を出し、同時に草双紙三種を公にしたりき。亦以て彼が如何に力を讀本に用ゐたりし乎を察すべからずや。而も此等の讀本は、概して非常なる喝采を以て天下に迎へられ、就中「三國一夜物語」「南柯夢」「弓張月」「賴豪怪鼠傳」の如き、皆直に歌舞伎劇、若く操劇に上り、或は南柯話飛廻双六及び三勝櫛の流行を見るに至たり。彼が後年の匿名著書「作者部類」に當時の狀況を記して曰く、

弓張月世評高かり。常世物語も明年發販の折一千部賣れたり。三國一夜物語は、發兌して後、大坂にて歌舞伎狂言に取組て興行しけるに、片岡仁左衛門か淺間左衛門、生涯第一の大出來にて、看

官群集三四十日衰べさりきと云ふ。江戸の讀本を浪花にて歌舞伎狂言にせし事是をはじめとす。大約文化中馬琴の戯墨、毎歳臭草紙讀本共に十餘種出板せさる事なし。其少なき時と云ども八九種發行しけり。戯作者ありて以來、一人一筆にしてかくの如く著編の年に多かるは前未聞也。遠方の看官は是を疑ひて、馬琴といふもの二人も三人もあるかといへり。弓張月は此後編を續こと都て五次、其度毎に板元の利市三倍なりと云。全本廿九卷、文化七年に至りて結局圓圓す。八年の春板元林庄五郎作者に報ふに、潤筆の外金拾兩を以てす。且北齋に爲朝の像を畫かせ、曲亭是を懸幅して祭れり。其贏餘多きをもて德とする也。

と。蓋し事實なりしなるべし。而して彼が如何に爲す所に忠實に、如何に自ら地歩を占め、又如何に事に當て執念く魂氣强く斷じて一歩を假すを肯せさりし乎は、彼と畫肆と彫刻師との間に於ける「梅柳新書」に關する紛紜を見ても之を知るに難からず。事は彫刻師米助なるものゝ怠惰より起りしものなりき。米助は巧妙なる技術を有し、生れ得て惡意あるものに非さりしも、酒を嗜みて事を怠ること少なからさりし者也。彼、馬琴の手に成りたる「水滸畫傳」「園の雪」等の挿繪を刻し、畫肆角丸屋甚助なるものに彫刻料六兩餘を前借して未た事を卒へず、而して同時に馬琴の紹介を以て畫肆鶴屋喜右衛門の爲に同く馬琴の手に成りたる「梅柳新書」の挿繪を刻し、爲に角丸屋の彫刻遲滯したるより、甚助の爲に官に訴へられ、馬琴亦之に連坐せむとしたりき。然るに馬琴は彼が前借あるを知らず、唯其頼み來れるかまゝに之を紹介したるに過ささりしを以て、連坐するに至らず、遂に示談を以て事は濟めり。而も馬琴は甚助か彼を連訴し

たるを怒り、斷して彼に「水滸畫傳」、「園の雪」の續稿を與ふるを許さゝりしのみならず、「作者部類」を稿するに及びて甚助の素生を明記し、以て之を筆誅し、且つ記して曰ひき、

この年(文化三年)の冬十月、角丸屋甚助一日榎本平吉(本所森下町の書賈也)を介として曲亭に謝して云。嚮には米助が事により謬りて先生を連訴したる所後悔今さら臍を嚙めとも甲斐なし。願くは先非を許されて、水滸傳園の雪の次編を稿したまへ。先當今緊要は、園の雪の彫刻既に竣らむとす、校訂をなし給はゝ幸甚しからむといへり。曲亭聞て怒りに堪へず、則ち平吉に答ていふやう。吾は素より人の借財の保人になりたる事なし、まいて人に金錢を借りて返さゝる事なければ、後安しと思ひたるに、甚助理不盡に連訴したる恨生涯忘るへからず、千萬言を盡さるゝ共其儀決して無益なりといふ氣色すさまじかりければ、平吉殆と困じ果て、宣ふ所理り也、さりながら、園の雪の校合をなしたまはずば、甚助必そのまゝにて製本發兌致すべからむには、板木師の鏤誤て、事を正すによしなし、是も亦先生の面目を損ふに似たり、よりて件の校合を甚助に取扱はせず、小人是を持參して御直しを受奉らむ、此義ばかりは許させたまへと、只管にわびしかば、曲亭漸く點頭て、げに云るゝ如く、園の雪には吾名號あるを、一字も校訂に及はずば後々までも遺憾なるべし、和殿自から往來して校訂を受けむとならば、其義は所望によるべき也と、既に約束したりしかは、其後件の校合は、平吉が日々携來て、なをしを受て、校訂三度に及び、摺刷を許すを待て、製本發兌したりけり。然るに標紙へつくる外題は、板下を作者に見せず、筆工が書たるまゝに彫刻した

れば、標注の標の字を漂に誤て、漂注園の雪と記せしを、曲亭後に見出して打咳けとも甲斐なかりき。此明(文化三年)の春、角丸屋甚助、又榎本平吉前川彌兵衛等を介として曲亭に罪を請ふ事初の如し。前川彌兵衛かいふ。水滸書傳は知らるゝ如く小人甚助合刻也、もし甚助と和睦を許したまはずば、書傳の次篇は稿本を小人に賜ひぬ、又園の雪の後篇は甚助か孩兒に賜へ、然かせば御意に悖ることなくて二書の嗣刻をなすことを得べしといひしを、曲亭つゝ〳〵肯せず。答ていふやう。書傳は和殿合刻と雖、其書に甚助名を除かざれば他か爲に綴る也、且其親と絶交して其子と交る方あらむや、二箇條共に受引がたしと、緊しく窘めて永く杜絶に及びけり。

又曰く、

初米助は、角甚の訴和睦に及びし年の冬、彼梅柳新書の刊刻大抵成就しぬれとも、そは下細工人に課せしのみにて、米助か刀もてすべき物のかしら未た鏤らず、この米助は、猶壯年なるに、酒を嗜みて懈る事多かり。曲亭此由を聞て、梅柳新書の刊行遲滯して年間發兌し難くば、吾仙鶴堂に對して面伏なるのみならず、必甚助に笑はれむとて、梅柳新書の板元に代りて屢米助に催促しぬれども、米助得應へのみして事果つべうも非ざりければ、此冬十一月朔日より曲亭自ら米助許に日々に赴くに、朝とく出て、日暮ざれば還らず、晝飯は宿所より割籠をとりよする日もあり、さらぬ折は牛込御納戸町なる飯店にて腹を結ひ、米助か梅柳新書の出像の頭顱を鏤るを打守りて、斯の如くする事一日も間斷ある事無れば、米助細工に怠る事得成らず、且他の細工をなす事も得ならぬ

は、困じて曲亭が未た來らざる已前、朝とく三階に打登りて、垂籠て他の板を鏤らまくす。其折曲亭が來て米助の妻に問ば、妻答て、良人は遁れ難き事ありてしか〳〵の所へ行き侍りなど云を、必らず空言ならむと猜して、やがて二階に登りて見れば、米助は果して他の板を鏤りて居り、曲亭に見出されてせむすべなければ、亦梅柳新書のさし繪を刊刻す。既にして一卷刻して終れば、曲亭傍より彫工の謬れるを校訂して之を米助に補はせ、既に補ひ果たる一卷の板は、人を傭ふて馱して板元鶴屋へ遣しけり。こゝをもて十一月の季に至りて鏤り果る程に、校訂も板元を勞することなく早く摺刷することを得たりしかば、鶴屋喜右衛門欣びて、米助には別に折乾二方金を取らせて是を賞し、次の日自から曲亭許詣來て、件の欣を述、脊代と錄して金五百匹を贈りしを、曲亭受ず

していふやう。吾儕米助が刊刻を懶らせじとて三十許日暇を費せしは、かゝる報ひを受む爲に非ず、吾讒て米助を其許へ紹介せしより、角丸屋甚助に連訴せられて不測の咎を得むとせしに、幸にして無異に治まるものから、米助生活に怠りて梅柳新書の發兌遲滯せば、和主に理なきのみならず、必甚助に笑れむ、吾此義を思ふをもて自ら勞して本意を果せり、吾若し浮薄なる者ならば人もたのまぬ骨を折らむや、米助許通ひたる日數をもて讀本を綴ること三十日に及びなば、其潤筆五六圓金は得易し、そを義の爲に見かへらで、事こゝに及べるにて意衷を査せらるべき也と、理を述て、受ざりけり。曲亭は弱壯より行狀義俠に近かりければ、斯る事多かりしを、稍老錬に及び、昨非を知りて求めて勞する事を要せず、萬事を自然に儘せしとぞ。扨米助は、梅柳新書を鏤果たる

年の暮に鹽引の鮭一尾引提げ來て、之を曲亭に贈り、謝していふやう。嚮には先生日毎に自ら貴臨し給ひて居催促せられし折は、いと恨めしく思ひしが、この故に思はずも生活に精を入れたりければ、常にはあらぬ此歳暮には、春の營みをもしても猶三四金餘りたり、是全く三十許日著篇の筆を止めて催促したまひたる先生の御かけに候へ、この欣びを申さむとて、珍らしけなき物を參らするにこそ、願ふは叱らで留置かれよといひけり。

と。彼已に是の意氣込みと此の忠實とを以て事業に對す。彼の著作か多數の讀者を有したりしも決して故なきに非ずと謂ふべし。

是の間彼が家に在りてはほい事なかりき。文化三年三月四日に於ける江戸の大火にも鎌倉河岸より西北は災を免かれ、彼は其宵九段坂上より消殘りたる猛火を望みて、

あの風をのがれて嬉し花の蔭。

と歌ひつゝ無難を喜べり。文化六年京都に於ける知人の需に應じて春の歌を『春風に柳のいとゞ小ゆるぎのいそしき年を又迎へけり。』と歌ひたりし歳の正月七日、叔父田原忠興の致仕剃髪するや、彼は名を進めて米山と曰ひ、

はかるともつきぬ齡はますの數

藤太か後のよねたはら君。

と狂歌しつゝ之を祝し、後障りありて米岳と改めしめり。又彼は此の前後に於て其女を武家の奥方に宮仕へせしめて、

目に見へぬ人の心に針ありと

思ふてみがけをのが身の錆。

と戒め、兒鎮五郎の爲に故郷太田の里に於ける五社明神に繪額(梅が

枝に金雀の集りたるを圖したるもの)を掲げて、

花笠の花にめでつゝ唐鳥も

まき繪にあさる日の本の春。

と題し、又淺草觀音堂に掲げしめたる繪額を賛しては、

ふみの道しげれすぐその筆つはな。

と曰ひ、以て其兒の前途を喜べり。而して文化七年には兒鎮五郎を

して法眼山本宗英の門に入て醫を學び、名を宗伯と改めしめり。宗

英は馬琴が少時の師山本宗洪の子也。鎮五郎時に年十四。

而して其交友に在りても、彼が名聲の隆々たるに從ひ之を慕ふもの

少なきに非ざりき。而も彼は猶擇て之に交はれるのみ。中には故き友

の中に在りても竟に相容るゝと能はざるに至りたるものなきに非

ず。彼が舊主の來訪と彼及び京傳間の不快との如きは、其重なる出

來事なりし也。中に就て舊主の來訪は文化三年正月五日の事に係り、

京傳との不快は文化六年十二月の事に係る。

文化三年正月五日彼外に出て、家に在らざりしに、彼が門に忍び乘

物を下ろさせたる貴人ありたり。笠深く被ふりつゝ輿を下りて彼を

訪ひ、彼の在らざるを聞き、懐紙を彼が妻に托し置きて歸り去れり。

彼歸て之を觀れば、則ち左の如く記されつゝありし。

木枯しに思ひ立けり云云と遺されし言の葉の空し

からで、今は東都に其名高し。

名乘らずに知る人ぞ知る梅の宿。

彼始めて其舊主なるを知り、驚き喜びて、乃ち之に脇句し、

名乘らずに知る人ぞ知る梅の宿、

君ならで誰ぞ千里鶯。

と曰ひたりしも、終に之を告ぐるの機を得ずして舊主の歿するに逢ひしと云ふ。

彼と京傳との不快は、主としての京傳の妻に關して事起れり。京傳は少ふして遊蕩の癖ありしもの、所謂十八大通の一人たる淺草御藏前の札差表德文魚と友とし善く、月中五六日を除くの外は常に吉原に在りて、遂に吉原江戸町扇屋の娼女菊園を妻とし、其歿するに及び、再び吉原江戸町玉屋の雛妓玉の井を妻として名を百合と呼びき。後彼れ百合の爲に髡頭(理髮店)の家扶を買ひ、月收五六金を得たり。一日馬琴に語て謂ふ、『吾に子なけれども弟京山に數子あれば父祖の血脈絶ゆるに非ず。かゝれは後やすきに似たり。然れども百合が爲に後の謀をなさずむばあるべからず。因て云云の家扶を購ひ得たり。又財あれば生涯安らかなるべし。吾身後渠若し零落困窮せば、世人必言はむ、渠は京傳か妻なりしものなりと。是吾が身後の耻なるのみならず。渠家事に功あり、其生涯の爲に謀らず、渠又孰に歟憑らむ、君夫如何とする。』と。馬琴則ち答て曰く、『吾が思ふ所は異なり。顏氏家訓に不云乎、遺子萬金、不如薄藝從身。君子は其子にすら財を遺さむと欲せず、況や妻に於てをや。君子苦心して千金を遺すとも恐らくは身後の勢今の謀る所と同じからず。是も又知るべからず。孔子曰。其人存則其政存、其人亡則其政亡。財有て身後家督定まらざる時は、所親其財に依て較計し、相爭ふて竟に其家を覆す者古今に少からず。君若し賢妻の爲に其の老後を憐まば、君よく保養して長壽ならむのみ。君老の齡に至らば賢妻も老婆たるべし。其間親族の中より篤實の子を養はゝ、後の患なからむか。且死生命あり、老弱不定也。賢妻若し君に先立

て下世せば、遺す所の財抑誰のものぞや。愚以謂財を遺すは後の患ひを遺すに焦し。』と。京傳聞て頗る悅ばず、遂に窃に含む所ありたり。既にして馬琴が文化六年十二月を以て「夢想兵衛胡蝶物語」を著し、中に淨瑠璃本「忠臣藏」の早野勘兵衛が妻輕の事に托して娼女を妻と同樣に思ふものゝ非を說くや、京傳見て以て己を譏るとなし、彼が怒りは忽ちに迸發したりき。翌七年正月彼は弟京山と共に馬琴を訪ふて年を賀し、語次此事に及びて曰く。『遊女にも賢女才女あり。且人の妻となりて貞實なるもの多し。大凡身を花街に沈るものは、或は親の爲にし、或は兄弟の爲にせざること稀也。是孝是悌にして客に身を任すもの豈憐まざらむや。吾れ經學に暗し。足下屢聖人の言を稱述す。若し聖人をして今日に在らしめて此等の是非を問はゝ聖人ぞれ何をかいはむ。足下聖人に代りて吾が爲に之を言へ。』馬琴曰く。足下の言究て是也。吾疎忽にして言を愼まずして大方の怒に遇へり。駟も亦何ぞ及ばむ。然れども世間に遊女を妻とするもの千萬人、未た吾書を恨み憤るものあることを聞かず。且聖賢の敎は大事に在りて小事に及ばず。男子に在りて女子に在らず。故に孔子曰。女子小人、爲難養也。遊女賢才ありとも貞實なりとも聖人豈是非を論せむや。漢水の遊女は今の賣色に非されとも猶且詩に禁たり。足下吾書を見ること再三せは其怒自ら解せむ。』と。彼益怒りて爭はむとせしに、京山傍より之を止めて已みき。爾來再ひ之に言及することあらざりしも、是より二人の來往は一年兩三回をなすに止まり、藏書の貸借の如きも、迭に書狀を以てするのみとなれり。

此くの如く彼れ馬琴は、其多年の知友たる京傳との間に於てさへ竟に互に相容るゝこと能はさらむと欲したるのみならず、「南柯夢」の挿

繪に關しては、更に葛飾北齋との間にも互に相爭ふ所ありたり。蓋し餘りに自負心に富み、餘りに自信力に富める二人が、到底永く一堂に並び立つ能はざるべきは、固より其筈なれば也。

斯くて彼が生涯の歩みは依然たる舊軌道を進行し、文化八年國學者村田春海が歿し、俄艦蝦夷に來りて戍兵の爲に八人を擒にせられたる歳に、彼は「占夢南柯後記」八卷、「青砥藤綱摸稜案」五卷、及び雜著草双紙四種を出し、文化九年白川侯松平定信が隱退して樂翁と稱し、藤田幽谷、山本北山が歿し、「寛政諸家系譜」が成りたる歳に、「摸稜案後篇」五卷、「絲櫻春蝶奇緣」八卷、及び草双紙六種を出し、文化十年後櫻町上皇崩じ、三洲尾藤孝肇が歿したる歳に、「皿々郷談」六卷及び草双紙一種を出せり。是歳春彼が前年の作たる「春蝶奇緣」の淨瑠璃は大坂に於て大に行はれたりき。又彼が三月二十日の雪に對して、

櫻咲く木の下風は寒くして
空にまことの雪ぞ降りける。

と狂歌したるも是歳也。其翌文化十一年彼年四十八にして、正月十三日六樹園石川雅望の狂歌會兼題に柳を賦し、

日の光りやふしわかねし青柳の
いとよりゆらぐ春の長閑けさ。

と高唱したりし歳は、則ち彼が著作的生涯に取りて再振の機なりき。彼は實に是の歳を以て彼が終天の大作たる「南總里見八犬傳」に筆を着けたれば也。「八犬傳」初輯五卷、及び同く大作の一たる「朝夷巡島記」五卷は是歳を以て稿し、外に草双紙五種を出せり。而して彼が同志の友にして又彼が著作の愛讀者なりし寛政三奇人の一人修靜菴蒲生

君平は、亦是歳の七月を以て歿せり。彼が異日の記に曰く、

學びの道のひとしくて、志の異らぬのみ、忘れむとすれど忘れ難く、思ふにも猶餘りあり。そを誰ぞと人の問はむに、修靜庵にまするものなかりき。この人や學びの道、我にひとしく、心ざまさへ似たりけり。生れし郷は異れとも同じ甲にと聞えしも、大方ならぬ過世なりけむ。世に二鞘の論なく、むつみ語らひぬる折々に、言はれしことの耳にとゞまり、懷かしくも、悲しくも、寢覺の老が曉には過ぎこし方の胸にみちて、像に立つこともありけり。

と。其相知りたるの狀想ふべき也。

此の前後より彼が著作は漸く其數を減じて、復た一時の如く多作することを努めざるに至りき。文化十二年「海邊測量圖」は成り、畿内に大水あり、柳亭種彦は「正本製」初篇を出したりし歳に、彼は草双紙雜

著四種を出し、文化十三年に「八犬傳」二輯、「巡島記」二編の外、草双紙一種を出し、文化十四年に草双紙五種雜著一種、文政元年に「八犬傳」三輯、「巡島記」三篇、草双紙雜著各一種、二年に草双紙二種雜著三種、三年に「八犬傳」四輯、「巡島記」四篇、草双紙五種、四年に「巡島記」五篇、草双紙二種、五年に「八犬傳」五輯、草双紙二種雜著一種、六年に草双紙三種を出し、徐ろに其著作的生涯を歩みき。

此の間彼が家庭若くは交友間には、文化十二年に鎮五郎興繼即ち宗伯の京都旅行あり。彼は嚮の西遊の日に自ら用ゐたりし旅衣を與へて、

十とせあまり四とせになりぬ旅衣
子に又着せて都見させむ。

と歌へり。文化十三年賴春水が歿したる歳の九月七日には、年五十

六を以て山東京傳を歿せり。彼は子興繼をして專に本所の回向院に會せしめり。而して文化十四年仁孝帝の即位あり、伊能忠敬東河、杉田元白鶴齋、古賀撲精里、及び老中伊豆守松平信明の歿したる歳は、事なく過ぎ、翌れは改元ありて文政元年となり、我が洋畫家の開祖司馬江漢歿し、外は英船の浦賀に來るあり、内は出羽守水野忠成（忠友の養子）の勝手掛となるありて、二分金を改鑄し、財政漸く屈するに至りたる歳に、正月京傳の遺妻百合狂死し、八月宗伯興繼新に居を神田同朋町にトして醫業を開始せり。時に年廿二也。兒子の獨立を見たる彼が喜知るべし。彼は直に一歌を賦して之を賀したりき。

とほつおやのくにしの德を仰ぎつゝ
ふたゝび起せ我家の風。

而して彼が兒興繼の師たりし法眼山本宗英は是歳に歿せり。又金銀の改鑄あり、「いろは文庫」の發兌ありたる文政二年に、彼は松前の松翁侯美作守道廣の爲に「駿馬錦帆の記」を作りき。松翁侯は彼を知りたる貴人中の一人也。彼を知りたる貴人中には有名なる冠山侯松平（久松）定常の如きありて、其「武藏名所考」を稿するや、彼に問ふ所のもの少なからざりしか、中に就て特に彼を優待したりしものを松翁松前老侯とす。

松翁松前侯は、寛政四年隱退以來詩歌風流に世を送り、好て彼の著作を讀み、屢物を賜ひ、事を問ひ、「八犬傳の初めて發兌せられたる時の如き、親しく鶴を抂けて彼を其廬に訪ひ、以て之を讃賞したる程なりき。」遂に文政二年「駿馬錦帆の記」を作らしめたる歳に、同家秘藏の大福米を分賜し、翌三年には彼か兒宗伯を擧げて抱醫師となし、

給するに月俸三口を以てしたり。去れは彼亦知遇に感じて屢其邸に詣り、以て其顧問に備はりき。而して嚮に文化四年を以て一旦蝦夷地を召上けられ、移て陸奥の梁川に居りたる松前侯章廣(道廣の子、志摩守)の文政四年に故地に復するや、彼は直ちに一篇の長歌を賦して之を賀したりき。

陸奥のえみしか國は、草の衣、眉連なりしなめ人の、猛き心に、獣なす已かまに〳〵行ひて、親を親とし慕はねば、君を君としいやまはず、家しもあらず、遠地近地にあさり漁り、朝な夕なふす矢さつ弓把り誇り、叛きまつるを御門より、軍の君をまたしつゝ、討し給へは、從ひつ、或は亂れて、年あまた貢を絶へて、ともすれば青人草を屠りたる、嘉吉の年に若狭なる武田の殿の、白眞弓はる〳〵道を踏分きて、彼往き此往き打治め、教へ導き、まつりごち、しかぞ鎮めて、常盤なす松前の城に百歳を四つ重ねつゝ、いそのかみ古りにし事の彌高き御代に聞へて、いやちこに、遠つ御祖のうるはしき勳もつひに、なまよみの甲斐なき迄にまがつ日もそこなひけらし、武夫の梁川へとて、月も日も移れは變る、島つ鳥憂かりける世に、喜びの時は來にけり、ゆくりなく舊の境にもとのごとかへされ給へば、冬ながら春かとぞ思ふ、春來ればあつまのさたを言さへぐ蝦夷に傳へて、蝦夷人の打も仰ぎて頼母しく思はむのみか、おしなべて知るも知らぬも、雛鶴の千歳の後も、龜の子の萬代までも、松竹の榮ゆるまゝに、限りなき北の守りは君ならで誰やはあると、斯くばかり言ほぎまつる、言の葉に詠むとも盡きじ、三枝の幸くありけることのみにして。

陸奥のえぞの高濱あれぬとも、

立かへる浪の花ぞめでたき。

と。既にして章廣國に就き、宗伯を伴ひ歸て給するに八十石五口俸を以てせむと欲せしも、宗伯は父母の老たるを以て之を辭せり。章廣乃ち彼を近習格に准じ、出入醫師の筆頭たらしめたりき。其優遇想ふべき也。

此の頃又仙臺の眞葛尼なるもの彼を慕ふて屢書を寄せ、且其著作の添削を請へり。眞葛は江戸の人工藤氏綾子と曰ふ。父長井平助仙臺侯の醫工藤某に贅するに及ひ、工藤氏を冒し、醫を業とし、彼女を同藩の士只野伊賀に嫁したり。彼女は幼より學を好みて文才あり。夫に後れて後は專ら文字を弄ひ、「獨考」其他の著作をなし、文政二年書を裁して其妹萩尼(名は栲、越前侯の姫君に仕へ、其歿するに及ひ、剃髪して瑞祥院と曰ひ、又萩尼と稱す。)をして齎らし來て著作の添削を彼に請はしめたりし也。彼が記に曰く、

文政二年己卯の春如月下旬、家の内のもの共の今年の始のことはきにとてやからがり行きたりし日、齢五そぢ計りなる比丘尼の從者一人率たるが來ておとなふありけり。取次くものいなき折なれど、打ちも措かれず、自ら出ていづ何處より來ませしぞと問ふに、比丘尼の曰く、尼は牛込神樂坂なる田中長益といふくすしに縁あるものにて侍り。主人に見參せま欲しと曰ひつゝにじりかゝりたり。予は文化の初より客を謝し、帷を垂れて常に人に交らず、遠地近地の騒客の多に來訪せらるゝも、舊識の紹介なければ病に托して逢はざりしに、ついてわろしと思べとも詮方なきまゝに、いな主人は出でゝ今朝より在らず、家の内の人共いづれへか行きたりけむ、己は暫し留守するもの也。何事まれ仰せ置かれよ、歸ら

は傳へまゐらせむと、惟光顔に答へたり。其時比丘尼は懷より一通の封狀と、看代と記したるこがね一封と、袱紗に包みたる草紙三卷を取り出でゝ、こは陸奥の親しき者より主人に届けまゐらせよとてゐこしたる也、草紙は女の書きたるをこの翁の筆削を願み侍るとよ、猶つぶさには此消息にこそあらめ、尼は田中許止宿し侍れば、翌のかへさに又とぶらひ侍りてむ、其折に一筆なりとも御返しを給はれと傳へ給へがしと曰ふ。予答へて、そは心得て侍れども、主人は年來筆執る業に倦み疲れたればとて、いづかたよりよざし給ふも斯るものは請引き侍らず、殊更留守の宿なるに預り置かば叱られやせむ、又た折もこそあるべきに、こは持て歸らせ給へかしと否むを、比丘尼は聽かずして、そは宣ふことながら御身の心ひとつもて押返されむことにはあらじ、兎まれ角まれ翌の朝は己のころに又こそ來めと、期をおして暇乞ひして罷り出でにけり。

と。斯くて彼は彼女の書を見るに、書きざま、尋大なりければ、返書を與へて之を戒め、更に辭旨懇切、眞情流露の書を得、彼女の爲に彼は、「獨考論」を著して之を贈り、同時に書を添へて『いつくまでもまじらひし事うけ給はり度思ひ侍れど、をとこをみなの交りは頭の雪を冬の花と見あやまりつゝ人もや咎めむ、且吾が業の暇なきに年頃思ふよじあれば、いと嘗き友すら疎くなり侍りたり、去れば御交りも是を限りと思ほし召されよ。』と曰ひ、以て其交を絶ちたりき。」而して彼は、是より先尾藩某氏の未亡人が「新潟」と題する草紙物語の添削を乞ひたりし時も之を辭し、江戸本郷に於ける田中某の女の如き、彼が女弟子たらむことを請ふ十年にして、彼は終に之を肯ぜざ

りき。

此ぐの如くにして彼が著作的生涯の中期とも稱すべき時代は、文化三年年四十を以て始めて「弓張月」を公にしたる頃より、延長十九年にして文政七年年五十八に至れり。其間文化年中は專ら健筆を揮て多作し、文政に入るや其量を以てするよりは、寧ろ其質を以て勝るを努め、力を用ゆるの所に自ら同じからざるものありたりと雖、世人の彼を喝采するは則ち一にして、彼が聲名は殆ど天下に知られたりき。然りと雖滿れば缺くる世の慣ひは、我慢彼が如きの士と雖、猶竟に免ること能はざりし乎、彼は高名なる上杉鷹山侯が歿し、塙保巳一が歿し、式亭三馬が歿したりし文政五年に「吾佛記」を作れり。人生家記の整理を謀るに至るは、其漸く老むと欲するの徵證なるを知らずや。果せる哉、其翌六年太田南畝の歿したる歳に至り、宗伯琴嶺の正月より病に臥すあり、年を超えて癒えず。加ふるに彼が妻百女亦同月の末に脚氣症に罹りき。而して彼の長女さきは、是歳三月を以て婚儀を擧げて伊勢の人吉田新六を入婿たらしめり。尋て其翌七年幕府が一朱金を鑄り、仙臺の眞葛尼が歿し、國學者清水濱臣が歿したりし歳に入るや、彼は正月六日夢想の聯句を得て、

草も木も齡や延む初日影、

春正月は百藥の長。

と曰ひ、二月甲子神田の琴嶺(宗伯)が家に鶯兒の初音を聞て、

大黑も數鶯も初音かな。

と歌ひしが、三月遂に飯田町の家を聟新六に讓り、改めて清右衛門興利と稱せしめ、自身は徙て神田明神下同朋町の琴嶺が家に居れり。移轉の日の狂歌に曰く、

呉竹の代を渡したり爲の
老を養ふ藪に隠れむ。

琴嶺醫を業とす、故に『藪』と言ふと云ふ。世俗庸醫を呼て藪醫師と曰ふ是也。五月八日剃髪して瀧澤笠翁と稱せり。

年頃著述の疲れにや由りけむ、髪の毛ちぎれ、たぶさ細りて、元結の届き兼ぬるを、油こそたく物するがいといぶせくも頻はしさに、名殘なく剃落せしは、五月八日の事也。いかに涼しくや覺ゆると、人の聞ければ詠める。

雪に乗る越路もものが白髪も
剃り捨てしより夏はすみよき。

剃落せし髪の毛思ひしより猶少なきを、つまみ寄せて包みたるたゝう紙に書付けゝる。

なか〳〵にしげるともなき兀山の
裾野に生ひし刈り草ぞこれ。

(十八) 著作者としての晩期

世に長への盛りなく、人に長への榮えなし。さしもに榮華を極めたりし文恭將軍の治世も、さしもに虹の如き氣を吐きつゝありたる瀧澤馬琴の生涯も、永く歳月の腐蝕に堪ゆるを得ずして、漸く秋風落莫の境涯に沈むことを辭する能はざりき。

將軍文恭公は文政十年を以て太政大臣となり、世子家慶は從一位に叙し、父子並ひ榮えて位人臣を窮むるに至りたりしも、公の治世は早くも已に盛りを過ぎ、財政は夙に屈して文政の初年より貨幣の改

惡を以て僅に一時を彌縫するの已むべからざるに至りき。加ふるに文政九年には諸國の凶作あり、十一年には越後の地震、九州の大水あり、十二年には江戸の火あり、天保元年には京都の地震あり、四年には大風あり、窮民の蜂起あり、五年には江戸の火あり、七年八年には天下の饑饉ありて、上下共に繁昌を減せり。又文政八年には太田錦城の歿するあり、同く九年には龜田鵬齋の歿するあり、同く十年には菅茶山の歿するあり、同く十一年には酒井抱一の歿するあり、書物奉行兼天文方たる高橋作左衛門の禁獄せられたるあり、十二年には白川樂翁侯の歿するあり、鶴屋南北の歿するあり、天保元年には石川雅望の歿するあり、同く二年には島田一九の歿するあり、同く三年には賴山陽の歿するあり、同く四年には島津榮翁の沒するあり、五年には文政の權臣たる出羽守水野忠成の沒するあり、八年には大鹽中齋の叛死するありて、當年の人物は次第に凋零に就けり。燦々爛々たりし寛政文化時代に於ける文物の野は、今や忽ちに悲秋蕭條の光景を現はし、遂に天保九年の江戸西城に火あり、畫家岸駒が歿したる歳に於ける將軍家の代替りとなり、文恭公家齊は隱退し、愼德公家慶は新に將軍となりき。

此の間悲秋の時代臻るに先ち、隱退の馬琴は、多少の閑月日を得たるに乘して、交友間の智識交換を圖り、先づ同好の士と耽奇會なるものを開けり。會は幕士桑山修理、柳河藩の用人西原一輔の發起に係り、會日を定めて、互に珍品奇物を持ち來り、以て之が論評賞鑑を事としたるものなりき。之に會員たりしものは、發起者の外に、彼及ひ一輔の子柳河藩の留守居西原好和あり、土屋家の士關克明、並に其子思亮あり、下谷長者町の藥商長崎屋山崎美成等ありき。修

理は勒負と稱し、龍珠館と號し、本所富川町に住せり。一輔は梭江と稱し、好和は松蠹館と號せり。克明は潢南と號し、書家關其寧の子也。思亮は名を源吾と曰ひ、東陽と號し、海棠庵と稱せり。美成は通稱を新兵衛、字を文卿、號を北峯と曰ひ、好問堂と號したりき。文政七年彼か隱退剃髪の歳第七月に發會し、繼續一年許にして已めり。之が結果は、山崎北峯の編輯に係る「耽奇漫錄」是也。

既にして彼は是歳十二月に發起し、山崎北峯と謀りて一種の文學會を起せり。號して兎園會と曰ふ。文政八年正月十四日關東陽の海棠庵に第一會を開きたるを初とし、同く十二月彼か著作堂に第十二回を開たるを終とす。之か會員たるもの、彼及ひ山崎北峰、關東陽、西原好和の外に、慕士輪池堂屋代太郎弘賢、飯田町中阪上藥商文寶堂龜屋久右衛門ありき。後に桑山修理及ひ柳河の西原晁樹、彼が兒琴

嶺舍瀧澤興繼宗伯、太田錦城の門人乾齋中井準之助豊民、興繼か經學の師たる上野の人遯齋清水俊藏正德（赤城と號す）、郡山の儒官櫻水荻生惣右衛門維則（字は式卿、徂徠の孫鳳鳴の養子）、越前鯖江藩麻布學究大郷金藏良則（號信齋）之に加はり、平安の人青李庵角鹿清藏比豆流（號桃窠）之が客員たりき。金藏、俊藏は當年の松崎退藏慊堂、葛西謙藏因是、佐藤捨藏一齋と共に林門五藏の一人たり。而して之が結果は、彼の手に編輯せられたる「兎園小說」是なりとす。彼が磊々合ひ難きの性情は、此くの如き老後の遊樂的集會に於てすら猶其鋒鋩を包む能はざりしと見え、彼は是歳十月の海棠菴に於ける兎園會に於て、好問堂と口論し、遂に互に其交を絶つに至りたりと云ふ。

而して一方に彼か一身一家が時運と共に秋風落莫の境涯に向ひたり

し實況は、此の前後を中心として屢書信を交換したりし「北越雪譜」の著者越後の鈴木牧之、「越後全圖」「佐渡全圖」の著者同く小泉善之助等に與へたる書中に、其一斑を察すべし。文政七年閏八月の彼が書に言ふ、『忰（琴嶺）事痼癆の症にて長病に罷成、今以引籠、其上飯田町に罷在候長女（さき女）並に武家方へ奉公に遣り置き候季女（くわ女）追々不快にて、一向に著述も出來兼、此節諸方より日々催促を受け候のみ、空しく光陰おくり候。然共娘共はまづ順快にて、追々出勤致候間、御休意可被下候。近來老衰いたし。著述も甚懶く、只一日逃れにくらし候得共、隱居の身分ながら、いまた養ひくれ候もの無之候間、いや〳〵ながらも著述もせねばならず、誠に生は役也と莊子にいへる如く、苦しきものは世渡りに候。』と。

此くの如くにして、彼は文政八年に「水滸傳」の翻案たる合卷「傾城水滸傳」を出し、並に「西遊記」の翻案たる「金毘羅舟」の二編、及ひ「殺生石」の二編、外に合卷一種、雜著一種を出したりき。此の前後に於て彼が著す所は多く合卷にして、殊に「傾城水滸傳」が一たび大喝采を以て世に迎へられてより、書肆は競ふて彼が合卷の著作を需めり。去れは其翌九年の如き全く合卷のみを出し、「金毘羅舟」「殺生石」「水滸傳」の稿を續きたるの外二種を公にし、更に其翌十年には、「八犬傳」「水滸傳」の續稿の外、六種の合卷を公にしたりき。」

此の文政十年彼が年六十一の歳は、彼及び彼の家に取りては一大喜悲の交錯したる時也。是歳三月宗伯興繼は年三十を以て妻土岐村氏を迎へたりき。土岐村氏名はみち女、紀藩の老三浦監物の醫師土岐村元立の女にして、資性温良、且容姿ありたり。時に年廿二也。

而して彼は見琴嶺の結婚を喜ひたる歳の六月、其僅に失ひ餘ましした

りし一枚の上歯を失ひ、乃ち『ははなくもきは猶若し我もかもさぼてんに似て常盤なるべし。』と歌ひ、以て其凋衰を自ら慰めたりしが、十餘日にして彼は卒に病に臥せり。琴嶺大に驚き、妻の兄土岐村元祐、法眼多紀安淑、季妹くわ女の夫宇都宮戸田家の醫師渥美覺重、及び林玄曠等をして病を診せしめ、晝となく夜となく之を看護し、復た怠る所あらざりき。而も彼が病は猶何時癒ゆべしとも見えず。彼は終に其自ら起つ能はざるべきを恐れて、乃ち辭世の歌を作れり、

世の中の役をのがれて元のまゝ
かへすは天と地の人形。

然るに一家一族の心盡しは竟に空しからずして、彼が病は次第に退き、八月七日に至り始めて床を離れ、名を改めて篁民と曰ひき。彼が病臥中日として其病を問はざるとなかりし屋代弘賢は、是の時『節毎に千代をこめつゝ榮ゆへきしるしぞ見ゆる篁の民。』と歌ひて之を慶したりき。

斯くて病は十一月に至りて全く癒えしが、彼は病中と雖猶全く筆を擱くこと能はず。七月下旬より筆を床上に揮ふて幾多の著作を稿したりき。其苦辛想ふべきのみ。

翌十一年二月には嫁みち女一男を擧げり。字して太郎と曰ふ。瀧澤家は再び喜びの眉を開けり。而して喜悲の交錯は是歳に於て亦再び繰返され、琴嶺宗伯は夏に入りて重き病に臥したりき。而して秋に及び病は漸く減じたりしも、是より彼が持病は愈益其數を加ふるに至りき。

文政十二年高屋種彦か「源氏物語」の通俗譯に擬して文恭將軍の宮中を描きたる「田舍源氏」の初篇を出したる歳は、事なく通過せり。

天保元年に入りて閏三月に、みち女は女兒つぎを擧げり。天保二年は通過せり。天保三年も通過せり。天保四年に入り、秋に至りて、彼は一朝右眼を失へり。彼は是より先文化五年、年四十二の時眼力の稍衰へたるを覺え、夜に入りて物を書くには必ず眼鏡を用ゆることゝし、戯に歌ふて、

くらかりを四十よりとは今ぞ知る
晝は目の玉夜はむば玉。

と曰ひたりしが、是歳（天保四年）秋一朝起き出づるや、彼は忽ち右眼の見る能はざるに驚きたりき。乃ち子琴嶺を喚びて之を視せしむるに瞳の上部流れたりき。琴嶺大に驚き、良醫を招きて之を診せしめむとせしに、彼は其到底癒やすべからざるを知りて聽かず。終に爲に一眼を失ふに至れり。

其翌天保五年は、夏に於て彼が瘧疾に罹りたる歳也。是れ方に彼が年六十八の時にして、嘗て其壽を六十八歳なるべしと夢みたることありしより、琴嶺の之を驚くこと一方ならず。乃ち自ら病を強めて潔齋し、杖に倚りて生駒の琴平宮に日參し、以て其父の壽を延へむことを祈りき。幸にして彼が病は癒えたり。而して琴嶺自身は却て是の秋より再び病の床に横はれり。加ふるに是時松前家は老侯歿して、是より彼が一家を待つこと復た舊の如くなる能はざりき。

既にして天保六年は來れり。琴嶺は依然として病の床に横り、是時年甫め八歳なりし瀧澤太郎は父に代て知人の家に年を賀しつゝ去りき。

斯くて一旦忘らむと欲したる琴嶺の病も、四月中旬に入りて肺疾となり、五月八日山陽頼氏の「日本外史」を讀みさしたるまゝ終に歿せ

り。時に年卅八也。乃ち玉照堂君譽風光琴嶺居士と法號し、之を小石川若荷谷の深光寺に葬りたりき。是日に於ける彼が深悲や殆ど譬ふるに物なき程なりし也。彼は歌へり、

遂に行く道にはあれど思ひきや
子を先立てゝ歎きせむとは。

又父の病を生駒琴平宮に祈りたりしことを思ひて、『なかゝれと親の齢を祈りける子の玉の緒はなどて短かき。』と曰ひ、痩せ枯れたる手に太郎を搔き寄せて、『好く人となりて大父大母をはごくめ。』と言ひつゝ絶え入りたりしを思ひて、『親を思ふ子もまた子をや思ひけむ、今はにかけし言の葉の露。』と曰ひたりき。

彼が一家の事情は、實に此くの如きものありたり。從て彼が著作も亦昔日の如く多きこと能はざりし也。文政十一年孫兒太郎の生れたる歳の如きは、大病の後なるに拘らず、彼が意氣は猶未だ衰へざるものありて、「八犬傳」、「水滸傳」、「殺生石」の續篇を始とし、讀本二種、合卷三種、雜著一種を著したるの外、新に讀本「近世説美少年錄」の筆を起し、同十二年は「美少年錄」、「金毘羅舟」、「八犬傳」、「水滸傳」の續篇、及び、「風俗金魚傳」、「繪本漢楚軍談」、外二種を稿し、天保元年には「美少年錄」、「水滸傳」、「金魚傳」、「殺生石」、「金毘羅舟」、「漢楚軍談」、外一種を稿したりしと共に、讀本「開卷驚新俠客傳」及び翻案「新篇金瓶梅」の筆を起し、同く二年には續稿八種外に一二種、同く三年には八種、同く四年には六種、同く五年には九種を出し、世上の歡迎亦猶盛にして、

曲亭の讀本數十種、新奇尠なからずと雖、就中弓張月、南柯夢、八犬傳を三大奇書と稱せらる。俠客傳又之に亞て、續出するを待

つもの一日三秋の如しといふめり。文政以來讀本の流行既に衰へしより、他作は出るも稀なるに、曲亭の一作のみ今に至て盛にして、年に月に看客に待るゝことと右の如し。（物の本作者部類）

と云へる有樣なりき。然るに宗伯が歿したる天保六年頃よりは彼が著作は著しく其數を減じ、僅に一二種乃至三兩種の續稿をなし、若くは一兩種の新作をなすに止まりき。蓋し彼の體力、家計は、共に彼の著作に對する便宜を供給するに甚だ吝ならむと欲したれば也。斯くて彼は天保六年其子琴嶺を喪ふと同時に、再び起て其孫太郎の後見をなし、以て爲に其家計を定めざるべからざる身分となりき。然りと雖、徐ろに顧みて其一身一家を觀れば、彼は其翌天保七年に年既に七十にして、孫太郎は則ち甫めて十歳の小童のみ。若し永く一家の餓渴を免れむと欲せば、常祿を得るの外復た其道あらざる也。是に於て、彼は彼の所謂無用の書を作て有用の書を買ひ、節儉力行の餘に聚め得て、以て其著作に資したりし藏書五千卷を賣れり。又其生平之を爲すことを喜ばざりし書畫會をさへ開けり。彼は之を開くが爲め自ら知人間を賴み巡り、天保七年八月十四日を以て七十の賀筵を設くるを名となし、兩國萬八樓に之を開きたりき。是日會するもの東條琴臺、大鄕信齋、太崔天民、菊池五山、谷文晁（代理）谷文一、渡邊華山、長谷川雪旦、鈴木有年、關根江山、松本董齋、歌川國貞、柳亭種彥、爲永春水、笑亭鯉丈、屋代弘賢、山本法眼、芍藥亭長根、薩藩の老職伊具氏を始めとし、無慮八百有餘人と註せられたり。而して彼は此くの如くにして聚め得たりし金を出して直に一御家人株（俸三十俵三人扶持）を買ひ、以て阿孫の爲に饑えざるに足るべき常祿を作りたりき。

此の時彼が其株を買ひたりし御家人は、四谷信濃坂に住し、四十年も住み荒らしたる家なりしを以て、彼は乏しきながらも若干の財を出して之を繕ひ、以て天保七年十一月十日に轉移し、是より其生平甚だ好まざりし山手居住をなすことゝなせり。而して之が公けの願は、是より先十月廿八日に許可せられしより、假に所親の三男を養ひ、之を瀧澤次郎と稱して出仕せしめ、以て太郎の年十六に及ぶを待ちたりき。

彼が境遇の彼が著作に對する便宜を褫奪せしこと、此くの如く其れ慘酷なりしのみならず、其の翌天保八年に、彼が飯田町の相續者清右衛門興利は年五十一を以て七月八日に歿せり。去れば彼は是より更に是時新に寡婦となりたる其長女の爲にも亦一半の心遣ひを分たざるべからざるに至りき。彼は是歳「後爲記」を作る。

而して更に歳華を新にしたる天保九年には、其僅に殘し得たりし左の眼さへも春來漸く霞むを覺え、夏より秋に至りて次第に甚しきを加へり。是れ彼が年七十二を以て「八犬傳」第九輯の下を著したる歳にして、文恭將軍は職を辭し、愼德公家慶は新に將軍となり、越前守水野忠邦は是時、時の首相として有名なる天保改革の令を出せり。

是歳畫家岸駒は歿したりき。江戸の西城は燒けたりき。

天保十年彼が眼の霞むは一層甚しきを增せり。彼は言ひき、『去年六月の改革令を見、方寸已に破れて復た述作するに氣勢なし。況や春來眼疾益其劇を加へ、今は僅に明を失はざるを幸とするのみなるをや。』と。而も猶未だ完結を見るに至らざる「八犬傳」を終了せむが爲に、彼は斷じて筆を收むるを肯ぜざりき。是を當年の識者高野長英渡邊華山の獄ありたる歳なりとす。華山は彼が尊敬せる友の一人也。

天保十一年夏より秋に至りて、彼が視力は著しく減じ、十一月終に全く其明を失ひき。而も猶未だ完結を見るに至らざる「八犬傳」を終了せむが爲、彼は斷じて其筆を收むるを肯ぜず。乃ち嫁みち女(號琴童)に代筆せしめ、以て其稿を續げり。是れ彼が年七十四の時にして、彼は是歳また其一妹を喪ひたりき。而して彼が孫太郎は、是の歳年十三を以て名を興邦と稱し、以て初めて出仕せり。外に在りては、光格帝是歳に崩じ、畫家谷文晁是歳に歿す。

其翌今古の多福多幸者たる文恭將軍が始めて一の不幸に遭ひて現世の藉を削られ、馬琴の親友屋代弘賢、一代の儒學王林述齋、及び高名なる渡邊華山も、亦同樣に現世の藉を削られ、江戸市に在りては町奉行矢部定謙か官を免せられて、目付鳥居耀藏が之に代りたる天保十二年に、彼は漸く秋八月を以て名にし負ふ「八犬傳」二百六卷を完結せしめたりき。文化十一年九月に筆を染めてより是に至て實に二十有八年也。而して彼が之を成すの爲め如何に大に、如何に甚く、如何に永く苦辛し、又焦心したりし乎は、請ふ暫く彼をして自ら之を語らしめよ。彼は自ら語りて曰ひき、

吾髫歳の時よりして、書讀ことを好みしかば、成長するに及びては一日も書卷を把ざることなし。恁而寛政二年の冬創めて戯墨の書策子二卷を編て、書肆甘泉堂が刊行せしより、今に至て五十二年。刊行の雜書物の本共に二百九十餘筆に及べり。這他刊布せざる筆記雜纂、或は二三葉の小紙子多かるを、數へ盡すべうもあらず。就中文化年間は、書賈に乞るゝ大小の物の本多かりければ、日毎に夙に起出で、机案に向ひつゝ其夜人定まで稿本を綴りて、人の爲に疲勞を厭はず。亥の時過ぎては、睡氣つくまで書を讀て

自ら樂みにす。尙佳境に入る時は、天の明るを覺えず。隣鷄の鳴くに驚かされて、轉て起出で、又机案に面ふ日もありけり。恁而年來を歷ぬる隨に、逆上口痛の患起しより、年五十に至ては、齒は皆年々に脫て一枚もあらずなりぬ。且夜枕に就く時仰き臥せば瞑眩して堪られず、横に臥せばさもなかりき。この比一名醫と晤談の折、吾この事を告しかば、名醫驚きて、足下生來血氣人に勝れたれとも、人の氣根は涯りあり、九石の弓も毎に緊く張て緩めされば、其絃斷さることを得ず。其樂む所を以て名利の爲に殉するは、賢者のせざる所也、今より些し緩めよ、といはれし義の理なれば、吾答て、敎諭承り候ひぬ、名利の爲に身を忘れて無益の筆硯に耽るにあらねど、少かりし時慾に義俠の心ありしかは、今に至て其癖うせず、一旦書賈に諾ひし稿本を等閑に做す時は、他等は發販の時日後れて利を失ふことと尠からず、是も亦不義に似たれば、事のこゝに及べるを、思へば愚かに候ひき、と謝して、是より夜學せず、物の本も年に二板と相定て、其餘は需に應ずることなく、夜は人定を限にして、早く枕に就しかば、身も漸々に安く覺えて、仰臥しても瞑眩せず、をさ〳〵養生を宗としける程に、吾還曆の年丁亥の夏より秋まで大病に嬰りて命危かりしも、幸にして瘥りにき。左右する程に、九年以前癸巳(天保四年)の秋、八九月の時候にやありけむ、有一朝不圖起出けるに、右の一眼見ることを得ず。打驚き且訝りて、故兒(琴嶺)に示すに、瞳子上の方流たり、療治なさるべしといひけり。其の後親族朋友書賈等まで療治を薦る者多かりしかど、吾敢て從はず。且つ以爲らく、吾は幼稚より眼の患なく、流行目だに病ことあらず、然るを一朝に右眼を失

ひしは、年來讀書筆硯の疲勞なるべし、且冬春毎に高き火桶を坐右に置きて、机邊の寒を防くこと既に久しくなりしがば、其火氣何時となく右明に入りて乾かされたるぞあらむすらむ、醫は老樹の片枝立枯たるに異ならず、非如醫療に術を盡すとも、草根木皮のよく及ぶべきに非ず、と尋思して、一日も筆硯を排斥せず。初は硯心見難て、毫を染るに不便なりしに、それも熟ては不便にも思はず。其後故兒の憂に丁りし年(天保七年)も世渡りなれば、忌ども閲ては又筆を把さるとを得ず、其次の年(天保八年)四谷へ移徙しても、左眼は異ることなければ、著編は倘年々に綴りぬる程に、戊戌(天保九年)の春の時候より、何となく左眼も亦翳むやうなりしに、夏に至りてはいよ〳〵其異るを覺えしかど、倘悟らず、とは眼鏡の曇りたる故ならめと、謬思ひて、俗に本玉と歟いふ水晶製の眼鏡の價貴きを厭はで、此彼と多く購求めて、掛替〳〵淩くものから、己亥(天保十年)の春に至りては、いよ〳〵かすみて、病眼なるを知りながら、本傳(八犬傳)未た大團圓に至らねば、書肆の需を推辭も得せず、猶辛じて綴るものこの外にもありけり。恁而去歳(庚子、即ち天保十一年)の春までは、本傳の稿本も故の如く十一行の細字にものせしかど、夏に至りては只曚々朧々として細字を書くこと得ならねば、其稿本を五行の大字にしつ、そも手綴りにて、去歳(天保十一年)の秋九月本傳第九輯四十五の卷まで綴り果して、刊行の書肆文溪堂の責を塞ぎにき。かくては明年四十六の卷以下を綴り果さむこと心許なし、先ゃ倘かくてある程に今一卷なりとも綴らはやと、愚心を勵まして、第九輯百七十七回一顆の智玉途に一騎の驍將を懲すといふ一段を、五行或は四行の大字にも

のしぬるに、字行も鈴灯(しどろもどろ)兵にて、且墨の續かぬ處あり讀かだし といへば、そを宅眷に補せなどしぬる程に、十一月に至りては宛雲霧の中に在如く、又朧月夜に立に似て、一字も寫こと得ならず なりぬ。只筆硯不自由なるのみならず、書畫を見ても楚と見えず僅に晝夜を辨じ、東西を知るのみ、いかにともせむ術なければ、書案を退け筆を投捨て、獨歎息のあまりに、

ながらふるかひこそなけれ、見えずなりし
書卷川に猶わたる世は。

と打詠じて、爐に寄てのみ居程に、文溪堂及貸本屋などいふ者さへ聞知りて、皆慨しく思はぬはなく、爲に代寫すへき人を索るに意に稱ふ然る者のあるべくもあらず、吾も亦失明ては生甲斐もなければ、這年の秋九月より次の年(天保十一年)まて、人の薦る醫師を三名まて轉藥しぬれども、未た毫も効驗あらず。去れば今茲(辛丑、即ち天保十二年)の春に至りて、吾又思ふに、八犬傳は今昔有難き大部の物の本なるに、始ありて終なくば、只看官の飽ず思はむのみならず、文溪堂か爲には後々までも利を全くしがたくて、遺憾こそあらむずらめ、人の爲に謨りて忠ならぬは、吾も亦耻る所也、然はとて吾孫興邦は倘乳臭ある机心うせず、且武藝を好める本性なれば、恁る邦助になるべくもあらず、他が母は人並にに じり書もすなれば、教て代寫させばやと、やう〳〵に思ひかへし つ、第百七十七回の中音音か大茂林濱にて再生の段より代筆させて、一字毎に字を教え、一句毎に假名使を誨るに、婦人は普通の俗字だも知るは稀にて、漢字雅語を知らず、假名使てにをはだも辨へず、偏傍すら心得ざるに、只言語をのみもて教へて寫する吾

苦心は、いふべうもあらず。況て敎を承て寫く者は、夢路を辿る心地して、困じて、果は打泣くめり。然而代寫一枚に滿れば、讀反させて、又敎て傍訓を寫するに、熟字を知らず、又句讀を心得ねば、讀時或は字を脫し、或はなき字を添え、讀すら輙からざるに、知らず心得ざる事を口授せられて寫く者の艱難を、思へばいと痛しさに、幾度か已めはやと思ひしを、又思かへして

筆捨の松のふる葉も冒の葉も

子等に敎えてかいするぞ憂き。

と打詠じて、且慰めつゝ、一二卷代寫させぬる程に、他もやうやくに熟て苦心初の如くにはあらず、偏傍なとは稍辨へ知りて、言を費すも舌の疲るゝまでに至らず。編中の出像は、代寫さすべきものなければ、吾只其人狀を圈點してもて畫工に傳ふるに、委細に注文を代寫させぬるのみ、稿本はさらなり、書畫工の寫本も吾いふ如く寫りや否心許なく思ども術なし。況文中に故事など引用むと思ふに原本に渉らされば、暗記の失あらむことを恐れて、命じて其書を拿出させて讀するに、漢籍は及ぶべくもあらず、假名交りの古書といへども傍訓なきは得讀ず、强て讀すれば鴃舌侏離にて、要をなさねば、援用ふべくもあらず。寫することは敎もすれど、讀することは吾見るにあらざればいよゝ難義にて、實に詮方なし。然ども敎誨を承る者の、困じながらも勉るにあらざれば、這十卷を綴り果して、局を結ぶに至らむや。縫刺の技薪炊の事などこそ他が職分なれ、文墨風流の事に代らせて其要をなさまく欲するは、理なしとも理なしと知りつゝも、月を累ねて、今茲辛丑の秋八月廿日といふ日に、本傳第百八十勝回の下編附錄目錄、諸

將の成敗其尾を備にすといふ結局大團圓まで、稍稿じ果たりき。

（中畧）昔清人毛聲山は、小說傳奇を好る隨に、嘗三國志演義を評註したる、其妙金聖嘆が水滸傳評註の上に在り。然るに他不幸にして老後に失明になりしかど、好む所を棄かたくやありけむ、又琵琶記を評註しぬるに及びて、一二の子弟に口授し、代寫させもて稿し果にきといへり。昔吾琵琶記を讀て是を知りぬ。他と吾とは同好にて且眼の患も相似たれど、其評註の精妙なる、自ら筆を把れるが如し。蓋唐山は文字の國也。子弟に文字なきものなければ、其言ふ所を一字も違へずよく代寫せしならむ。天朝は言語を宗とす、素より文字の國風ならず。刎婦幼に代寫さするに、管を搦りて思を搆る、波瀾曲折の文何所より出し來つべき、僅に其意を達するのみ。然は筆工に寫せたるも、又其刻本も、婦幼に讀ませて校訂しぬれば、脫字こそ咎めもすれ、誤字は吾見るにあらされば、开は正すに由もなし。看官かくと知らざれば、校訂疎鹵也とて笑ふもあらむ。瞽者は文章の觀に管らずとは莊子にいへり。文章は文字の事のみならねど、瞽者いかにして文場に遊ばむや。僅に詩を賦し、歌を詠のみ。又枚乘か江賦に、水母以鰕爲眼といへり。吾鰕子をもて眼にせむ歟、其の鰕子も亦得難し。寔に嗚呼の遨遊なれば、好まぬ人は誹謗るもあらむ。小說物の本の大筆妙文なるを憎むもの、昔も和漢に是あり。羅貫中は水滸傳を作りし惡報にて、三世啞子を生にきといふ。續文獻通考に誚あり。又紫式部は源氏物語を作りし惡報にて地獄に墮たりと人の夢に見えにきといふ。寶物集（卷四）に這證文あり。水滸源語は稗史物の本中に大筆妙文にて、或は其の山賊の義俠をもてし、或は貴介淫娃の事を旨と

綴りたれば、和漢同日に是等の訕ありしならめ。否然らずは西遊宇津保も大筆妙文なるに、是等の作者に啞子墮獄の惡報なきは如何にぞや。這故に唐の韓愈は得ゝ譏名亦從といへり。是に由てこれを觀れば、吾も亦八犬傳を作りし惡報にて、老て半盲に做りにきといふ譏誚もやあるべからむ。非如何ともいはゞいへ、吾髫歲より讀書を好みて、和漢の歷史諸子百家の書小說傳奇歌書草紙物語に至るまで覘はざる所なく、聖敎賢誨の辱きはいふもさら也、醫書佛經卜筮方位皆其一隅を獨學して、孤陋ながらも、和漢の治亂、君臣の得失、士農の務むへき所、工商の巧拙奸直、貨殖淸貧の樂む所、獵漁牧樵のある所、名所舊跡、禽獸草木の名、才と不才と人情の厚薄浮沸、其大概を識ることを得たる、學問の餘樂をもて、且蒙昧を醒さむ爲に、戲墨の策子を編做して、書肆の需に應じたる、其潤筆にて足らされば、毎に衣食を省き、節儉を旨として、和漢必用の書籍を購求る者五十有餘年、其書藏めて五六千卷、六十餘櫃に至りしも、貽卑むと思ひし子は早逝し、吾も亦老眼衰眊して、讀書得ならず做りしかば、減沽却して紙魚も漏さず。事皆書餅になるものから、猶肚裡に殘りたる些の書あり文あるをもて、恁ばかりの口を利而已。

と。是に至て、讀書家たるもの誰か爲に一掬同情の涙を掩はさるを得むや。彼は歌ひき、

浮萍のうきしすさびもいましめの
筆をよるべの根なし言の葉。
あはれとは見る人おもへ八重すだれ
かゝるやみ目にあみはたす書。

又、

戲墨新奇長。多編有是書。學仙師視壽。毛穎汝如何。
世にわびて身は隠れ簑かくれ笠
あだなる名のみ打出の槌。

而して彼は、此の後も猶徐ろに「美少年錄」、「新編金瓶梅」等の稿を續きたりき。

是歲(天保十二年)三月七日彼が妻曾田氏百女は、年七十八を以て歿せり。法名は默譽淨舟到岸大姉、小石川茗荷谷深光寺に葬る。

天保十三年一種の出版令は出されて、「江戸繁昌記」の作者寺門靜軒、及び柳亭種彦、爲永春水の小說板本は歿收せられ、壬寅曆は頒たれ、習學所は廢てられ、矢部定謙は歿し、柳亭種彦、爲永春水は歿したりし歲、彼は「吾佛記」二卷より五卷までを稿せり。

天保十四年重ねて印幡沼の開鑿あり、天保の改革者たる老中水野忠邦の罷免ありて改革の廢絕となり、平田篤胤は歿し、香川景樹は歿したる歲に、將軍愼德公の日光社參あり。彼が嫡孫太郎興邦亦供奉の列に在りき。彼は爲に「兎園小說」三十卷を伊勢の友小津桂窓に賣りて五金を得以て其愛孫の旅裝を調へり。

翌る弘化元年には、老中伊勢守阿部正弘勝手掛となり、水野忠邦の嚴峻に代るに寬弘を以てし、天下は恰も暴風雨後の日和に逢ひたる如き思ひをなしき。是歲和蘭の使節は來りき。江戸城は火ありき。松崎慊堂は歿しき。而して翌弘化二年には有名なる米國水師提督彼理の浦賀に來るありて、『黑船來』の警報動き、鎖國三百年の迷夢は警破せられたり。是歲江都に火ありき。水野忠邦及び鳥居甲斐守耀藏は罰せられたりき。而も彼が家は事なくして過ぎぬ。

弘化三年仁孝帝の崩御ありたる歳に、盲目なる彼は年八十を以て新に、「女郎花五色石臺」の稿を起し、乃ち之が初篇二篇を出せり。是れ米艦が再び來りて互市を乞ひ、輿論は紛起し、人心は恟々たりし歳也。江戸には火あり、關東には大水ありき。

翌弘化四年は、忝くも先帝孝明帝の天位に即かせ給ひたる歳也。高田與清は是歳に歿せり。彼は是歳「五色石臺」の三篇四篇を稿せり。彼は此の歳旦に歌ふて曰ひき、

こゝろみる筆さへ人の手をかりて
とぶさまうす春の言の葉。

此の如くにして徐ろに其晩期の著作生涯を送りつゝありたる彼も、翌嘉永元年戊申(書家葛飾北齋の歿したる前年)には高齢八十又二春秋に達し、時雨そぼ降る冬十月十三日の朝に至り、俄に胸痛喘息を發じたりき。乃ち一二の服藥をなしたりしも効なく、十五日に草間宗仙をして來診せしめ、喘息は稍治むるを得たりしが、廿一日より病勢漸く亢進せり。宗仙は其容體の尋常ならざるを察し、若し意に叶ひたる名醫あらば、併せ診せしめむことを勸め、家人をして之を告げしめしに、彼肯ぜずして曰く、『若き者か餘命を貪るものならば兎も角も、吾極老に至り、醫師三昧入らぬとなり、宗仙の見立に違あり、藥に違あらば、外の醫師を頼むこともあるべし、醫案療治共に正理也、何を苦てか醫師を取替へむや。』と。既にして四谷坂の中島玄伯をして來診せしめしも、固より異る見立あらざりき。十一月五日に至り、晝の間は雑談平日の如くなりしが、夜に入りて遺言する所あり。六日朝寅の刻に及び、寛政當年の大思想家たる彼は、終に端然として永劫の眠に就きける。

嘉永元年十一月八日辰の中刻出棺、同く未の刻に小石川若荷谷清水山深光寺に於ける瀧澤家歴代の墓地に葬り畢ぬ。最日葬を送るもの愛孫太郎興邦(病を強めて輿して棺に隨ふ。)、瀧澤清右衛門(さき女の後夫正次)、渥美祖太郎、同鎌太郎(覺重名代)、伊藤喜間太(半七名代)、山田宗之助六人の施主を始めとして、合計三百五十餘人なりき。法號は著作堂隱譽簑笠居士。

江都小石川傳通院前を横に北西竹早町に向て去り、左折して吉利支丹坂若くは藤坂を下るものは忽ちにして一個の小溪谷に出づべし。是所謂若荷谷にして、若荷谷を北西行し、藤坂より一二町に至れば、路右に「厄除觀世音菩薩」と題する石標を見る。一條の磴路竹樹叢をなすの臺地に上るべし。門前に蒼翠天を染むるの老樅樹あり。是則ち清水山深光寺也。

寺前一區の墓地中、瀧澤家の墓標五基。一は文政六年三月馬琴の立つる所にして「瀧澤氏祖先之墓」是也。見了院殿正屋覺傳居士及び一蓮院殿心月妙傳大姉の法號を刻す。覺傳は馬琴六世の祖也。一は常光院月山秋圓居士(寛文十年九月十日)、松葉院貞窓良節大姉(貞享元年八月十二日)、願譽護念唯稱居士(享保元年十月廿八日)、順譽至心貞教大姉(享保六年十二月十七日)、清譽相覺淨頓居士(寶暦十年十二月十九日)、放譽圓相妙岸善女(明和元年九月廿五日)、機善堂文譽嶺松琴鶴居士(嘉永二年十月九日)の法號を表面に刻し、圭山妙白信女(延寶八年十一月二日)、慧雲宗智信女(元祿四年十一月廿五日)の法號を右側に刻す。秋圓良節は、松平堅綱の冢宰たりし臺右衛門夫妻也。唯稱、妙白(前

妻)貞敎(後妻)は興也夫妻也。淨頓、妙岸は興吉夫妻、琴鶴は馬琴の孫興邦也。一は便譽頓覺成正居士(諱興滅運兵衛年五十二、安永四年三月廿一日)、海譽知覺興正大姉(吉尾氏諱門子年四十六、天明五年六月廿七日)、深譽勇遼羅文居士(諱興旨臺右衛門年四十、寛政十年八月十三日)、玉照堂君譽風光琴嶺居士(諱興繼表字宗伯年卅八、天保六年五月八日)、操譽順節路霜大姉(安政五年八月十七日)の法號を刻し、左側に香蓮妙淨信女、勝善童子、昌安院淨譽法倫比丘尼、智清童女、慧空童子、智香勝惠の法號を刻し、背面に了幻童子(文久二年四月十三日)の法號を刻す。是馬琴が安政十年九月を以て再立したる父母の墓標に後加へ刻したるもの也。成正(父)、慧正(母)、羅文(兄)、琴嶺(子)の次に刻したる路霜は、琴嶺興繼の妻土岐村氏みち子是なりとす。一は表面に孝譽光覺慈正信士(初右衛門興春年廿二、天保六年八月四日)、源譽淨善信士(清右衛門興利年五十一、天保保四年七月八日)、廓譽然生信女(安政元年十二月廿一日、年六十一)、香譽明薫信士(清右衛門伯嘉年四十二、文久三年二月十六日)、惠心清薫大姉(明治卅一年八月十二日、年六十九)、光圓童子(嘉永六年二月十六日)、顯照童子(萬延元年八月二十一日)の法號を刻し、右側に春月成童子(寛政六年正月十五日)、蓮移童女(同九年正月十九日)、秋夢童女(同十一年十月四日)の法號を刻す。其中慈正は馬琴の兄興春、淨善は馬琴の養子興利、然生は馬琴の長女にして興利の妻たるさき女、明薫はさき女の後夫正次(嘉永四年二月歿す、年五十)の後を承け、馬琴の子興繼の長女つぎ女の夫たりしもの、清薫は則ちつぎ女也。而して他の一基にして、墓地の南の方稍低き處に少しく離れて立つもの、實に馬琴夫妻の墓となす。

墓は三級の基石上に立ち、屋蓋あり。『瀧澤氏墓表』の篆額下に著作堂隱譽簀笠居士(嘉永元戊申年冬十一月六日)、默譽淨舟到岸大姉(天保十二辛丑年春二月七日)の二行を刻し、上部屋形の石に矢車の紋、臺石に乾坤一草亭の印影を

刻す。又左方の側面には『著作堂老翁江戸人。源姓、瀧澤氏。名解、字瑣吉、一字篁民、號曲亭。所著雜書、國字小說、大小二百九十餘部。皆行于世。令嗣興繼先死。嫡孫興邦爲嗣。翁享年八十二。默譽會田氏、名百。著作堂渾家也。所生有一男三女。歿年七十八歲。』の若干字あり。樅樹蔭をなし、風雨多年、漸々たり、又凄々たり。

(七) 馬琴の家庭及交友

瀧澤馬琴は身小說の著作を事としつゝも、本領は別に在るあるを期し、常に稱して『詩歌連俳戲作など皆風流の遊びにて、文學の末藝也。假令上手になりとも、身の爲人の爲にもならず。和漢の書籍を看破して身を修め、非を爲さじとするの外、學問は是れあるまじく存じ候。名利を好むも人のやみ難き處なれども、才あり智ある人の

後世に名の聞えざるはなし。然らば名を好んより學ぶに如かずと存候。徒に博覽と稱せられ、或は口に聖教をさへづりても行ひ聖教に もとり候ては、名の高きも虛名也。學者物知りも羨むに足らずと存候。學ぶ事は誰も學び候得共、行ふ事の難きを思へば、斯くは申にて候。』と曰ひたりき。

去れば彼は、其主張も其實行も全然儒教の道德に據り、壯歲志を改めたる以來は、宛然として一個の道學者なりき。殊に最も正邪善惡の區別に嚴密なる寬政時代の權化とも謂ふべき偏固窮屈なる道學者なりき。彼が小說に於て到る處に主張し、彼が小說の主人公が到る處に實行しつゝありたる所は、一則ち彼が日常の行爲を律しつゝありたる法則なりき。是の故に家庭に於ける彼は、則ち峻嚴なる家長なりし也。交友間に於ける彼は、則ち傲岸狹峭なる朋友なりし也。而も其峻嚴は決して愛情なきの峻嚴に非ず。其傲岸狹峭は決して惡意あるの傲岸狹峭には非ざりき。

彼が嘗て其著「自撰自集」の首に无名氏の名を以て自ら其行狀を錄したる中に曰く、『應精費思居多養生保衛亦過人雖記憶不衰而老足疲勞奔走爲其數舟轎遊山翫水之樂幾希矣節儉不啻是已省衣食而修造祖塋售藏書以賑給貧族且也教其子以嚴刻實慈愛追慕祖先表裝遺墨者數卷思欲考索先世所不傳以卑於兒孫苦心三十年筆錄多有其孝誼亦若此』と。蓋し事實也。

彼は日常家に在りて孜々兀々著作に從ひ、所謂精を磨し思を費すと甚た少なからざるものなりき。而も彼の事を爲す、極めて詳周なると共に、又極めて秩序正しく、恰も一定の速度を以て一定の運轉をなすへき器械の如く然りき。從て彼か成す所は決して小少に非さ

れども、之を彼の體力精力に比すれは必ずしも過度なるものには非さりし也。加ふるに彼の意を攝養に用ゆること甚た力め、一定の著作をなし、一定の家事を辨し、一定の日記を誌し、而して其寢食を一定の時刻に於てし、以て其精力の消耗を防けり。彼か一旦醫師の忠告に逢ふや、直に之に從ひて、是より夜學を廢し、著作も年に二板と定め、夜は必ず亥定（亥刻即午后十時）を限りとして寢に就きたりと云へるか如き、則ち之か例に非すや。

家庭に於ける彼の日常か然かく秩序的に、然く峻嚴に、自ら持したりしのみならず、其家計を處理する、亦同く峻嚴を以てし、節儉を以てしたりき。彼は生平務めて一錢の浪費をも省き、其家主として の收入の外は僅に一枝の筆を以て家計を立て、斷して不義の借債をなさず、又人の爲に請判を捺する如きことをもなさず、以て自ら頂

天立地後ろめたきことなきを期したるは、彼か常に自ら揚言したりし所の如し。加之彼は豊かならざるか中にも猶少なからざるの金錢を投し、以て所謂五千餘卷六十餘櫃の古書珍藉を聚めり。其如何に儉素を以て家計を處理したりし乎は、之を察するに難からさるに非ずや。是れ實に彼か家風なりし也。

身を奉じ家を持するの、然ると同時に、彼は其士女を教養し、其家人の待遇するにも、亦同樣の峻嚴を以てし、亦同樣の秩序を以てし、兼て同樣の節儉を以てしたりき。彼の所謂子を教ゆるに嚴刻を以てして實は慈愛なるもの是にして、彼か妻も、彼か一子三女も、克く其風化する所となりたりし也。彼か妻會田氏はもと溫良貞淑の婦人に非ざりき。否、彼女は永く大洲侯の殿中に在りて、寧ろ派手好の婦人なりき。又性悍にしてかたくなる所あり、決して御し易きの婦人には

非ざりき。加之彼女は彼女の夫婿がなす如き閑居隱遁の生活に對して寧ろ反對の嗜好を有する者なりき。然るに彼の之に對する、和易方正を以てし、以て共棲四十七年の間敢て違言あらしめず、能く彼女を化して其儉素清約なる家風に安せしめき。方直の行を出すに慈愛眞摯の至情を以てするに非ざるよりは、焉ぞ克くこゝに至るを得むや。若し夫れ彼が兒琴嶺興繼に、至ては彼が天地間に於る唯一の兒子として彼が心身に能ふ限の愛を注きたりしもの也。從て彼は彼を全く彼の理想的人物として成功せしめむと期し、彼の理想的性格を以て彼に望み、彼の理想的技能を以て彼に望み、又彼の理想的言行を以て彼に望み、而して彼の理想的教養を以て彼を教養したりき。彼れ琴嶺か夙に嚴正なる家庭に育せられ、夙に文字を知り、九歳にして清水赤城に儒を學び、金子金陵に畫を學び、十二歳にして佐野東洋、荒木適齋に書を學び、更に蒲生君平、太田錦城、龜田鵬齋等の門に出入し、十四歳にして山本宗英に、又鈴木良知に醫を學び、小坂元祐に鍼を學び、廿一歳にして家をなし、廿四歳にして松前侯に知られたるは、則ち所謂理想的教養の結果なりしに非すや。彼か玉照堂、謙齋、芳流舍、守忍菴等の別號をなして、謹愼謙虛、以て身を持したりしは、則ち所謂理想的教養の結果なりしに非すや。彼か父母に事へて至孝に、病褥の中に在りと雖朝々祖先を禮して怠らず、病中杖に依りて父の病を琴平宮に祈りし如きは、則ち所謂理想的教養の結果なりしに非すや。唯彼は稟性虛弱にして竟に其父の理想的教養に堪ゆるに足らず、爲に一年三百六旬日の强半を病褥に消し、天保六年夏父に先ちて死せり。彼か妻土岐村氏みち女は亦貞順なる婦人なりき。善く舅姑に事へ、多病なる夫婿を愛護し、年三十

にして夫婿に後れてよりは、一方に三兒を愛育すると共に、一方には舅氏の爲に著作を代筆し、寡居三十七年にして安政五年年六十五を以て歿せり。亦彼が風化の及ぶ所を見るべき也。而して彼の三女さき、ゆふ、くわ亦同じく彼が家風の兒なりしものゝ如し。さきは飯田町の家を嗣て聟與利及ひ正次を迎へ、安政元年年六十一を以て歿し、ゆふは田口某に適き、くわは渥美覺重に適けり。

然り而して琴嶺の歿してよりは、彼亦其教養の甚た峻嚴に過きたるを悔おたりき。是の故に其孫與邦を育するに當てや之を待つと甚た寛に、其曾祖父與減に似て性武技を嗜むを以て復甚た文事を强ゐず、以て其自在自由の發暢をなすに委したりき。而も彼は其祖父たる彼か歿したるの日既に已に病褥に在りて、其翌嘉永二年十月年廿二を以て歿せり。而して彼か長妹つぎは飯田町の家を繼ぎ、次妹さちは彼が後を繼げり。斯くてつぎ女は其後明治卅一年八月年六十九を以て歿したりと云ふ。

家庭に於ける彼か實に此の如くなりしと共に、交友間に於ける彼の果して如何に傲岸狹峭なりし乎は、其人を容るゝと甚た吝に、人に許すこと甚た稀なりしを見て之を知るに難からす。所謂水清ければ則ち魚なきもの實に彼の謂に非ずや。去れは彼は彼が嘗て自ら稱したりし如く、『不レ好レ爲二人師一。不レ與レ有二爭氣友一。交杜二絶寵辱勢利一。自以比二於社櫟一。垂雌辭レ客、讀レ書著書、以送二半生一焉耳』なるものにして、彼は實に弟子をも有せざりし也。否實に自ら好て之を有するとを辭したりし也。彼は實に朋友をも有せざりし也。否、實に自ら好て之を擇ひたりし也。其初請ふて彼の弟子たらむと欲したるもの、若くは彼より雅名堂號を得むと欲したるものは、固より少なきに非ざりき。而も彼は悉く

之を辭したるのみならず、後には人の勸めに從ひて、東修金を定め、又雅名贈與料を定め、以て其煩を防ぎたりき。而も猶東修を納れて入門し、若くは琴字を乞ひ得しものに、嶺松亭琴雅あり、柯亭琴梧あり、六々齋琴鱗あり、櫟亭琴魚等ありたり。然りと雖彼の此等を敎ゆる、忠孝倫理修身齊家の事を以てして復た戲作に及ばざりき。是を以て彼等は遂に次第に相遠ざかり、後には僅に伊勢の櫟亭金魚が獨り二季の東修を贈り來るのみとなりたりき。去れば彼は殆ど全く弟子を有せざるものなりし也。

其初好て彼の友たらむと欲し、好て彼と相交らむと欲したるもの、固より少なきに非ざりき。而も彼は擇て之と交はりたるのみならず、又交はりたるものと雖往々にして終を全ふせざるものありたり。彼と同時代の作家中岩瀨京傳は彼が師友にして、彼も每に其才子なるを認め、戲作者としては及び難きの戲作者なることを稱したりしに拘らず、猶二人は遂に其交情を終始することを能はざりしに非ずや。島田一九は彼が其好人物なることを稱したるもの也、而も別に深き交りをなすには至らざりき。若し夫れ菊池三馬と岩瀨京山とに至ては、生平彼と甚だ相善からずして、京山三馬は彼が傲岸を憎み、彼は彼等の人となりて賤みたりき。葛飾北齋は畫家中の馬琴也、而も彼は彼に對して兩雄並起つ能はざらむと欲したり。山崎北峯は一個の考證家也、而も彼は彼と兎園會場に論爭して其交を絶てり。只野眞葛尼は一個の巾幗文人也、而も彼は彼女に交りを辭せり。去れば彼は殆ど全く朋友を有せざらむと欲したりし也。而して其僅に有したりし友は則ち遠方の友に非ざれば則ち却て彼を容るゝの友のみ。然らざれば寧ろ彼を愛顧するの貴人のみなりき。例へば讃岐の木村默

老、伊勢の小津桂窓、殿村篠齋父子、越後の鈴木牧之、小泉善之助の如き是也。滑生君平の如き是也。松前松翁侯の如き是也。約言すれば、彼は家庭に於ても、交友間に於ても、決して親み易く交はり易きものにはあらざりし也。彼は彼と同く朋友を有せず弟子をも有せざりし新井白石其人と、ほゞ同樣の性癖を有したる家長なりし也、朋友なりし也。

(八) 馬琴の人物

昔は一羅馬僧あり、新井白石を目するに、大抵五百年にして一たび出つべきの人物なるを以てしたりき。瀧澤馬琴は小說界の新井白石也。彼亦大抵五百年にして一たび出つべきの人物たるを失はず。彼は固より將に將たるの人物に非ざる也。天空海濶の襟度を有し、光風霽月の高懷を有し、清濁並せ呑むの洪量を有する人物にも非ざる也。然れども彼は彼自身に於て已に天に聳ゆるの巨人なりき。彼は固より萬人を率ゆるの器量を有せざりしかとも、彼自身に於て獨力萬夫に敵すべき力量を有したりき。蓋し彼は最も厚き天分を有したるものなれば也。

最も厚き天分とは何ぞ。彼は驚くべく強靭なる記憶力を有したりき。彼は驚くべく銳利なる推理力を有したりき。又彼は驚くべく強大なる意思の力と驚くべく強大なる體力とを有したりき。而して生れ得て極めて清廉謹直の人なりき。從て彼は竟に驚くべき氣魂强き人となりたりき。驚くべき精細周密の人となりたりき。又驚くべき自信力强き人となりたりき。同時に極めて理窟多き人となり、極めて執着心深き人となり、更に極めて愛憎心强き人となり、野心逼しき人

となり、雄文達筆の人となり、多能なる人となり、何處までも負けぬ氣の人となり、限りなく自尊心自重心に富める人となり、自己中心主義の人となり、何事に對しても自ら用ゆるの人となり、果ては高慢なる老人となりき。去れば一方より之を觀れば、彼は極めて狹隘なるの人なりし也。又極めて狷介なるの人なりし也。恰も自己の哲理を以て今古を貫き萬有に亘りて之を解釋するに足ると信じたるものゝ如く、一大理想の下に總ての問題を解釋し、總ての道理を拜跪せしめむと期し、其理想の容れざるものは、悉く之を虛僞邪惡の事として秋毫も假借する所あらさらむと欲したり。而して彼自身に在りては則ち之か理想の天授的擁護者たるが如くに自ら信じ、此の大理想を以て總ての問題を解釋するを全く自家の責任なりとし、一事一物の解釋せられざるあるを耻つること、恰も市朝に撻たるゝ如く然るものありき。是の故に其世に立つや、昂然として千里の薮を雄歩し去る虎の如く、赤兔馬に騎して敵境千里を獨往したる關雲長の如くなりし也。換言すれば、彼は野に在りたる新井白石なりし也。廟廊に立ちたる新井白石に比すれば、稍陰氣にして一層ひねくれたる新井白石なりし也。

彼か一族は何れも記憶力に富み、彼か長兄羅文の如きも夙に記憶力の大なるを以て知られたるものなりしが、就中彼は其尤なるものなりき。彼は八歳の時兄と共に觀來りたる演劇の筋を精細に記憶し、以て聞く者をして之か强記に舌を捲かしめたりし以來、彼か强記は著名なるものにして、老後失明の日に在りて猶依然として記憶の衰へざりしこと、彼か自らの明言したる所なりき。而して其推理力の大なることは、彼か著作の如何に理窟づめにして、如何に其理窟の

精細緻密なる乎を見ても之を知るに難からざるべく、又其意思の力の強大に、其體力の強大なりしは、彼か力士とならば必ず幕内の力士たるを失はざるべしと相せられしを見ても之を知るべく、其容易に已に克ちて過を改め、其容易に規則正しき生活をなし、一定の行爲を以て終天を一貫したりしを見ても之を知るべし。然り而して彼か生れ得て如何に清廉譎直の人なりし乎は、其清約身を持し、理由なくして一毫を人に受けず、理由なくして一毫を人に施さゞりしを見て之を知るべきのみならず、又其一事一行も必ず自ら辨護し、以て斷然毫釐の屈を身に受けざらむと期したりしを見ても之を知るへきに非ずや。

若し夫れ彼か如何に氣魂強さの人なりし乎は、單に其四百部に餘れる大著作をなしたる見て之を知るへく、彼か如何に精細周密の人なりし乎は、單に其多年の間

十二日戊子　明六ツ時頃より雨。天明より小雨、但し多くふらず、其雨氷れり。

昨今餘寒尤甚。晝の間晴、夕方曇、夜に入りて大雨烈。

一、今日の雨、去年元日の雨の如く樹の枝に氷りて瓊玕の如く、松の葉皆白くなりぬ。今茲も亦豊作ならん歟。晝前より薄く暗て、夕方又曇る。夜中風烈。すべて去年戌の元日の如し。

一、晝時みの屋甚三郎より使札を以て八犬傳六篇三度目校合摺り來る。即刻引合せて、内二ケ所直し落有之分、しるし付け遣し、并に四の巻二度校合、一冊遣之。

一、巡島記六編四の巻不殘今日初度校合し畢る。夜に入り同五の

巻の内十丁校レ之。

一、今日宗伯をして去年備書に寫させ候兼山麗澤秘策四より八まで令レ讀レ之。多く誤寫あるの故也。

一、松前内河合藤十郎爲ニ年始祝儀一入來。宗伯對面、早々歸去。十六日壬辰晴、長閑。

一、兼山麗澤秘策寫本六の巻校正、誤字補寫し畢ぬ。八時過より みの屋甚三郎八犬傳六篇五の上すり本二番校合持參、居催促に付、即刻取かゝり、夕方までに再校畢る。此内十一十二十三〆三丁は初校なり。幷に同書看板の事、筆者相應の者無レ之に付、五編の看板予か方に有レ之を取出し、少々はかり直し、書入いたし、右を以ほり立可レ申旨談し遣す。薄暮歸去。

一、晝前屋代二郎より紙札、太郎殿歳旦の歌幷に未央宮古瓦の圖一枚、内二枚は松前老侯と大野幸次郎へ遣しくれ候やう申さる。幷に予か歌を求めらる。則春興の歌を認め遣レ之。幷に八犬傳三篇被レ返レ之。あと借用いたし度旨申來り、且舊冬度々とり次遣し候合巻代二郎殿より直につるやへ遣し候所、名前知れかね候よし申來る。八犬傳四編め可レ遣の處、宗伯とり違へ五編め遣レ之。つるやの事彼方より代料直に可レ遣謂無レ之、いたされ方難ニ心得一に付、已來は取次の事かたくことはり遣す。

一、其後屋代二郎兄又太郎殿來る。先刻つるやへ代料遣し候事、舊冬宗伯を以て其段申述させ候節二郎聞ちがへ、直に鶴屋へ遣し候事全く心得違に候。已來とても是迄の通り世話致し呉れる樣被レ申候。予挨拶に、合巻類板元より取よせ進じ候事御元樣のみならず、懇意中より無レ據たのまれ遣し候事も多分有レ之、皆一

口に板元にて私方の帳面にとめ置候。そをヌキ〳〵に被遣候ては、間違の節、私方めいわくに及び候。右うけ書にても有之候やの旨相尋ね候所、うけ取置候よしにて出され候間、然らば此書付暫く借用いたし、つるやへ掛合、此分さし引殘りの分勘定可致と申談じ、右書付預りおく。幷に八犬傳四編先刻とりちかへ候に付、四冊幷に紺新しきふるしきともかし遣す。○○已來の事くれ〳〵たのまれ歸去。

一、お百持病癪氣にて乳の下いたみ候よしにて、日暮より打臥す。宗伯は如例貪着せざるにより、予熊參丸とり出し、服藥いたさせ、寢に就かしむ。當分の症也。

一、溝暮渥美覺重より使を以て、過日の箱提灯被返候。むら請取おく。口上返事申遣す。（「雅俗日記」文政十年正月中の一節）

と言ふか如き細緻なる日記を記したりしを見ても之を知るべく、同時に彼が如何に自信力強く、如何に自尊自重心に富み、如何に自己中心の人なりし乎は、其高く自ら標致して滔々たる戲作者に伍することを恥ぢ、京山三馬輩を土芥視し、人の彼を呼ぶに「曲亭」若くは「馬琴」の戲號を以てするものあれば、佛然として直ちに其無禮を咎め、是を以て京山を怒り、是を以て眞葛尼を戒めたりし見ても之を知るべく、甚しきは彼が著作の貸本に落書するものあるをさへ怒りて、巻首に

凡士農工商とも、夫々の家業職分に因て持用の品物を尊み、今日を營ぶと世上一般なり。然るに、近世寫本の巻中に、聊白紙あれば、くさ〳〵の書入または形さへ覺束なき木偶人、或は見ぐるしき男女の陰體などをかき、君臣父子の中にて面を赤め合ふことと間〻多

じ。これ等は畢竟一時の興に乘じての戯れならんか。併其職分の道具へ疵付給ふは僻事也。著述拙く、筆者の誤あらば、只言語を以て其過を咎め、卷中への戯書樂書はゆるし給へと願ひ奉つるになむ。

と題するに至りたるを見ても之を知るべき也。將た彼か自ら尊み自ら重するの極、延て其父祖家系に及ぼし、或は「家廟遺墨」を編し或は「吾佛記」を作り、或は其系譜を整理し、或は其墓塋を修造したりしを見ても之を知るべきに非すや。又其如何に理窟多き人なりし乎は、彼か著作の總てに於て之を證し、其如何に執着心深く、如何に愛憎心深き乎は、彼か子興繼、孫興邦等に對するの至愛之を證し、若くは其書肆角丸屋に對するの憤恚、浪速の儒醫五島赤水に對する怨恨等之を證するに足る。赤水は名を惠廸字を文敏、通稱を一彦と曰ひ、文化七年其文集「赤水餘稿」を刊し、中に馬琴を論して、『謂業非兩三世之弊也。舉莫斯爲甚。安所託遁辭乎。今亦老而不死。聖人復起、必與夫原壞爲二賊矣。』と曰ひたるもの也。然るに彼れ馬琴は廿五年後の天保五年にも、卅二年後の天保十二年にも能く之を記臆し、「物の本作者部類」及ひ、「八犬傳」に於て之を辯し、或は記して、

文化年間浪速に赤水と號するものあり。播陽五島名は惠廸字文敏と稱す。五年戊辰（文化五年）秋彼か著したる赤水餘稿一卷あり。其編中に吾を論ずること酷しく、且吾を比するに原壞か蹲居を以てし、吾を罵るに賊を以す。當時吾友京師なる角鹿比豆流是を吾に告て、爲に解嘲の文を作らんといひおこしゝを、吾許さず。且諭して道く。好て人の惡をいふ者は聖賢の憎む所也。他と吾とは相識らず、且纖芥の怨だもなきに、彼何等の人なれば恣に吾を論

じて忌憚ることなく罵るや。是必狂人なるべし。狂人の走る時不狂人も俱に走れば、是狂人に異らず。吾少かりし時より爭氣ある人にものいはず。彼が如きは齒に掛くるに足らざるに、可惜紙筆を費して解嘲の文を作らば、大人氣なかるべし。吾今赤水餘稿を閲するに、彼が第二子を悼む文に、其子の遊女冶郎に哀慕せらるいをもて榮とす。其心術の陋きと知るべし。吾不肖なれども國禁を犯さず、不仁不義の行ひなし。年々に編次する物の本は、世に裨益なしといへども、大官允許ありて、刊行の書肆併に書畫工刷人貸本屋等まで是に由て衣食するに、彼一人聲を嗄して云々と罵るは、人の名利を娟嫉にあらずや。意ふに今江戸に戲作者多かれども、彼吾をのみ論じて這惡言を出しぬるは、既に學問ありながら兒戲の策子を旨と綴るを似げなしとして憎むにやあらん、是爭を好也。他焉ぞ吾志を知ん。昨今この赤水餘稿を這地の書肆等に尋しに、其書名だも知る者なし。しからば是實れざる冗藉也。彼其書を賣らんとて吾名を假りて編中に這惡論を載たる歟、是も未だ知るべからず。开を解嘲の文を作らば、他か謀る所に陷て赤水餘稿の報筴を世に引くにしも似たるべし。已ね〳〵と推制めて、毫も掛念せざりしかば、人には告ず忘れたりしに、言の便宜に思ひ出て、傳れば、三十餘年の昔にぞなりにける。

と曰ひ、或は記して『夜行の狗吠は怒るも要なし、身を傷られずば亦可なり。』と曰ひ、又

文化年間儒者蒲生秀實曲亭のする所を見て賛して云。戲墨を賣て旦暮に給すれども、其權已に在り。財を受て敢て謝せず、亦手實を出す事なし。世に遊ぶもの此くの如きは幾稀なり。